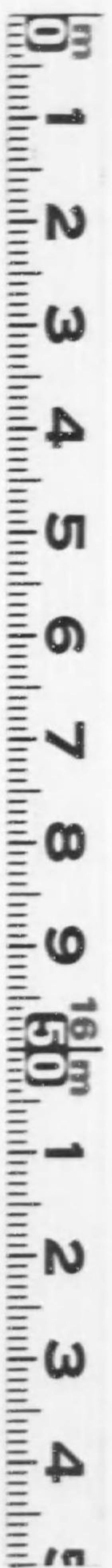
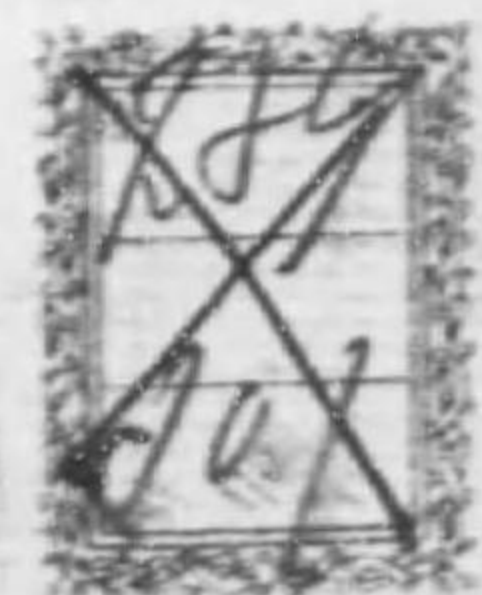
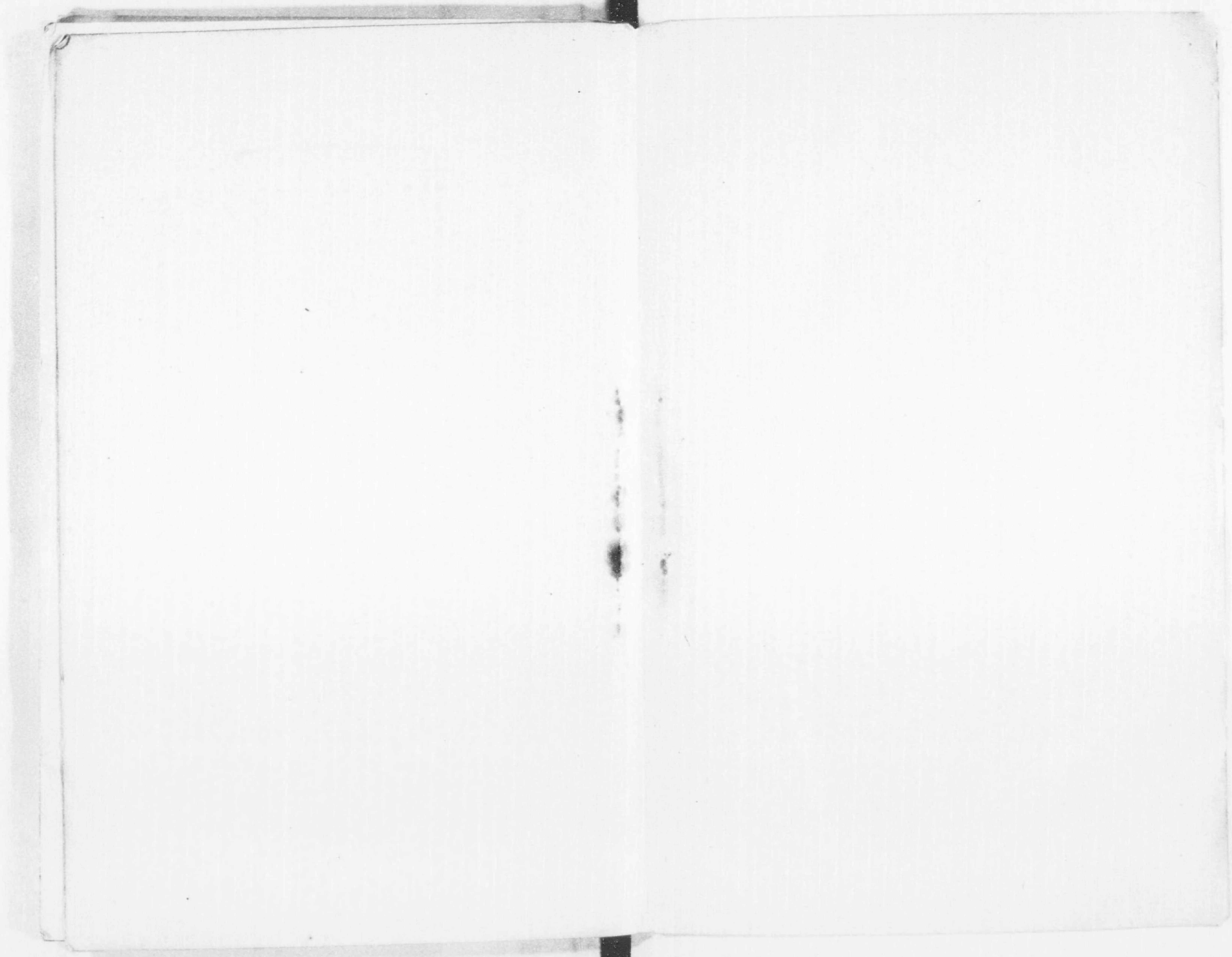


外丹
福井縣人士錄
第一卷

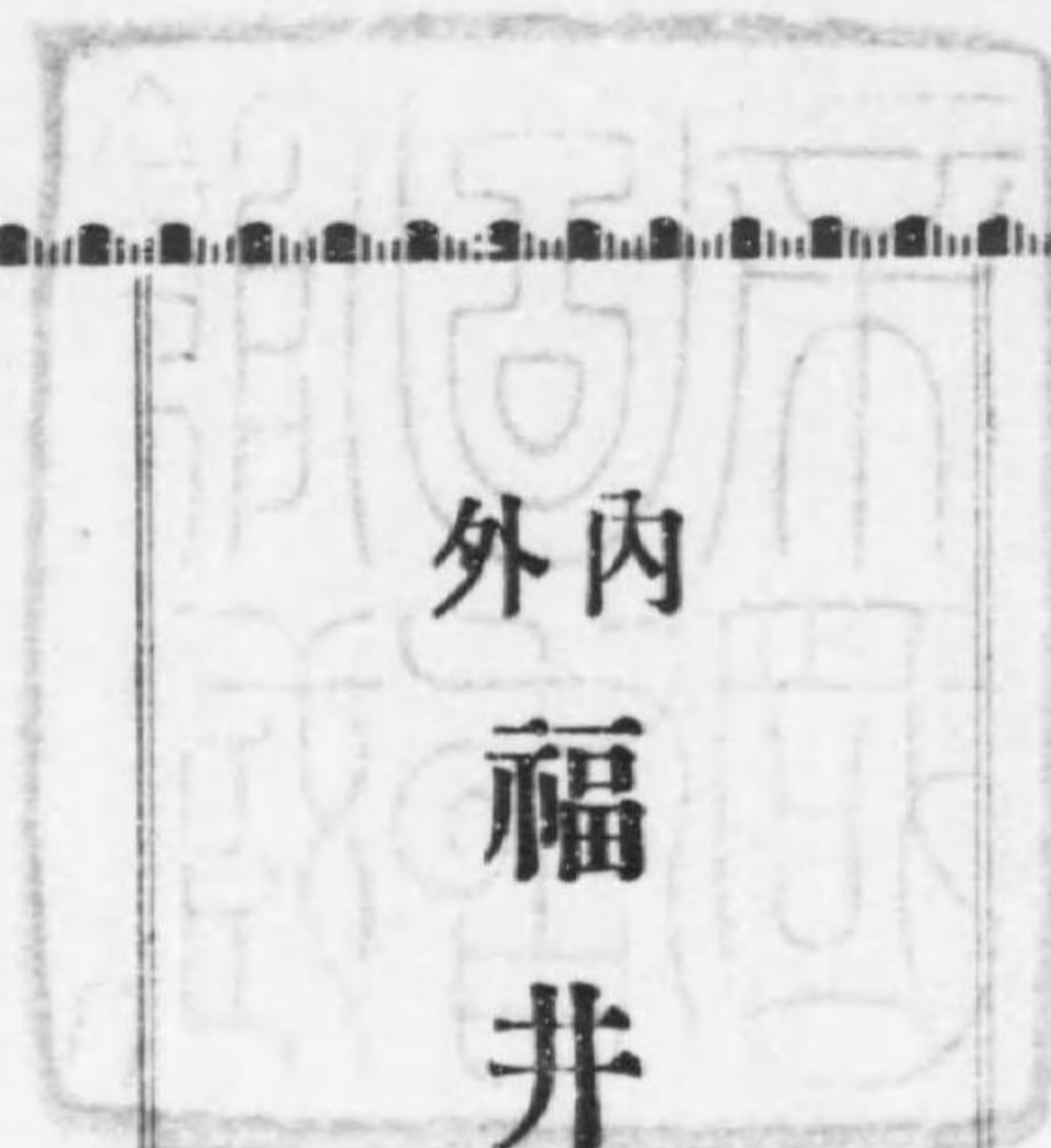


始





47115
757



大正十一年編纂

內外
福井縣人士錄

(第壹卷)

福井黎明雜誌社發行

大正
11. 8. 30
內文

序

凡そ信用の重せらるべきものは其種一にして足らず
と雖もその容易に評價し得ること否に因るの大なるを
知るべし、吾人茲に感ずる所あり、本書を發行して諸
士の經歷を明かにし、出身を詳かにし且つ特能、性質
功名、榮達等を記し、相互の親善を圖り又諸士の成業
を紹介するのみならず、それに據つて以て後進子弟を
刺戟し誘導扶掖に努め、勸奨奮勵に資すること共に先進
諸士の休光を後世に貽すの要具たらしめんことを、然る

に世間此等緊要必要なる此種のもの尠なきは何故そや
 是れ夙に識者の憂る所にして、又世人の遺憾とする
 たらすんはあらざるなり、既に本書の成る所以亦爰に
 存す、今や數月を閲みして編するに迫ひ以て江湖に頌
 つに當り、併せて現時の思想界に對し些か貢獻する所
 あらば幸なり、聊か紀して序となす。

大正十一年八月

編纂者 青柳仙之助識

芳名索引

| | | | |
|---------|----|---------|----|
| 杉田定一氏 | 一 | 高島茂平氏 | 三七 |
| 武内徹氏 | 一二 | 小田利吉氏 | 三九 |
| 山本條太郎氏 | 一五 | 柳原九兵衛氏 | 四〇 |
| 義江民治氏 | 二〇 | 吉田間右衛門氏 | 四二 |
| 安本吉次郎氏 | 二二 | 廣部徳壽氏 | 四三 |
| 池田七郎兵衛氏 | 二四 | 淺野彌一郎氏 | 四四 |
| 笹原清氏 | 二六 | 安本安治氏 | 四六 |
| 河崎清氏 | 二八 | 齋藤顯氏 | 四七 |
| 森慎一郎氏 | 三〇 | 松浦良次郎氏 | 四八 |
| 大村勇太郎氏 | 三一 | 早見光太郎氏 | 五〇 |
| 岡崎利市氏 | 三二 | 黒川與志雄氏 | 五一 |
| 松下常次郎氏 | 三四 | 藤田篤氏 | 五三 |
| 石田憲三氏 | 三六 | 小林三郎氏 | 五三 |

近藤 與作氏
 林 末治氏
 若林 源四郎氏
 森 建太郎氏
 熊谷 五右衛門氏
 佐々倉 彌之吉氏
 荒井 關造氏
 乘木 弄世氏
 尾崎 彌右衛門氏
 長谷川 正氏
 齋藤 初五郎氏
 岩崎 恒吉氏
 竹村 等氏
 伊藤 孝氏
 大村 與三吉氏
 生田 卯兵衛氏

五四
 五七
 五七
 五九
 六〇
 六一
 六二
 六三
 六四
 六六
 六七
 六八
 六九
 七一
 七二
 七四

中川 清太郎氏
 河合 甚三郎氏
 嶋田 兼松氏
 増山 與三平氏
 島田 伊三次郎氏
 田中治郎左衛門氏
 青木 豊氏
 酒井 善松氏
 今村 作榮氏
 松村 新藏氏
 白崎 敬三氏
 水島 力氏
 藤山 幸之助氏
 藤川 喜太郎氏
 名村 忠治氏
 山田 甫氏

七六
 七八
 七九
 八〇
 八二
 八三
 八五
 八六
 八七
 八八
 八九
 九〇
 九二
 九三
 九五
 九六

野村 勘左衛門氏
 下里 宜氏
 西島 數榮氏
 柳原 隆氏
 中島 昌夫氏
 田中 喜三郎氏
 岡田 總太郎氏
 前田 太吉氏
 石田 義信氏
 廣田 稻吉氏
 田村 春吉氏
 西島 順榮氏
 義江 佐次兵衛氏
 青柳 俊範氏
 佐藤 新吉氏
 青柳 彌十郎氏

九七
 九九
 一〇〇
 一〇一
 一〇二
 一〇三
 一〇五
 一〇七
 一〇八
 一一一
 一一二
 一一三
 一一四
 一一五
 一一六
 一一七

牧本 董氏
 北林 肇氏
 高谷 常吉氏
 奥田 繁氏
 吉田 金右衛門氏
 齊木 小太郎氏
 酒井 定一氏
 岩崎 定一氏
 高津與三右衛門氏
 大井 猪三郎氏
 川森 伊右衛門氏
 松山 染吉氏
 橋本 博氏
 吉田 義政氏
 河合 久作氏
 多賀 勤氏

一一九
 一二〇
 一二一
 一二三
 一二四
 一二五
 一二六
 一二七
 一二八
 一二九
 一三一
 一三二
 一三四
 一三五
 一三六
 一三七

多田義孝氏
秋田吉平氏
恩地政右衛門氏
清水春松氏
田中義仁氏
石田嘉隨氏
久保義隆氏
光成清士氏
竹下賤夫氏
高山庄太郎氏
天谷鴻作氏
前田友造氏
寺尾工子氏
大塚由右衛門氏
阿部精氏
白崎仁三郎氏

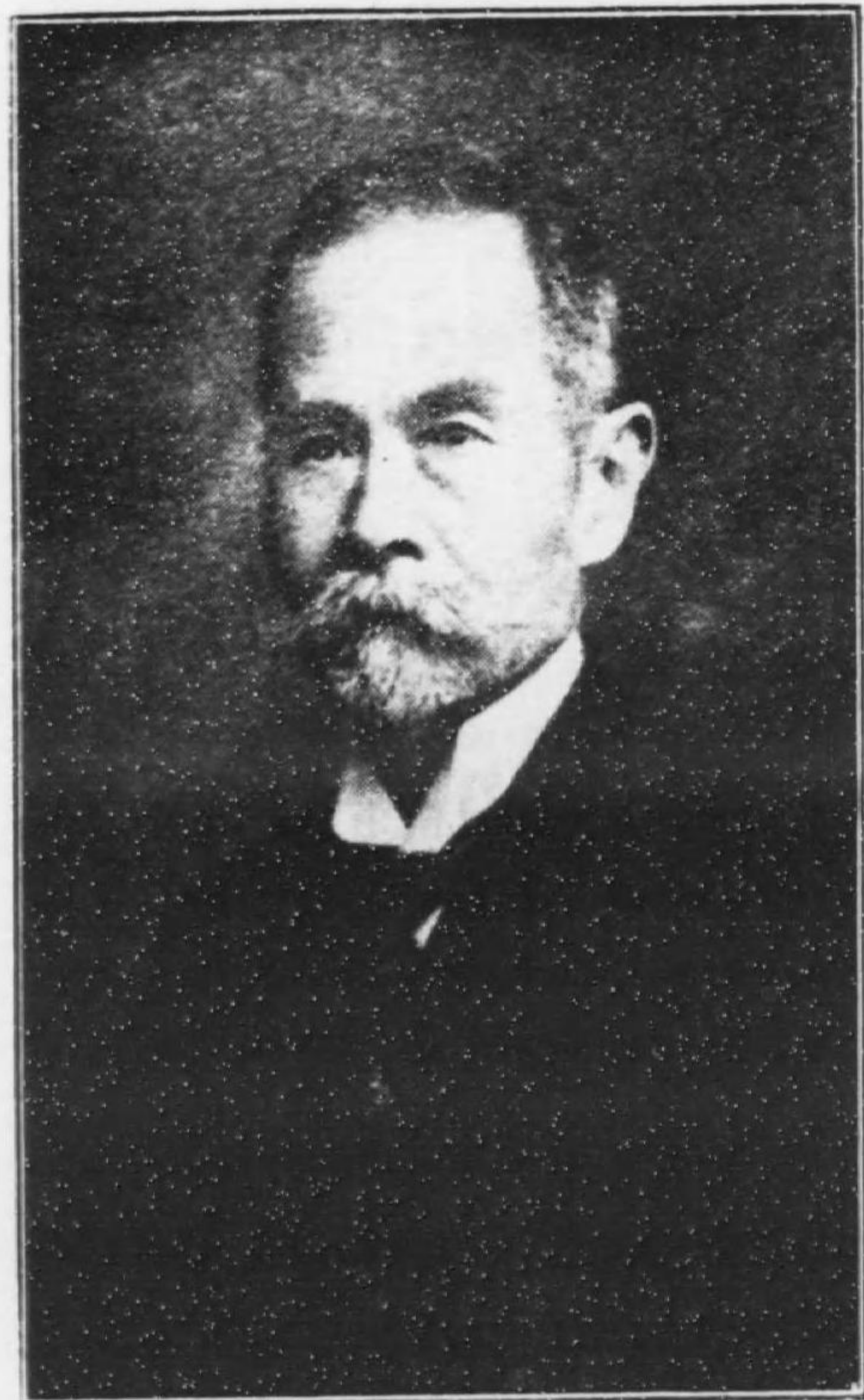
一四二
一四四
一四八
一四七
一五〇
一五一
一五二
一五三
一五四
一五六
一五七
一五八
一五九
一六〇
一六一
一六二

神尾義一氏
西川義男氏
谷口字右衛門氏
鷺田修氏
野村外來雄氏
布川正輔氏
鷺田又兵衛氏
佐野新吉氏
谷川彦太郎氏
吉田亮氏
坪内外吉氏
野路作太氏
西岡雅孝氏
植木信一氏
松村吉太郎氏
矢野忠一氏

一六三
一六五
一六六
一六八
一六九
一七〇
一七一
一七三
一七四
一七五
一七六
一七八
一七九
一八一
一八二
一八三

岩永利一氏
南部園右衛門氏
河合清兵衛氏
藤田稔氏
大月齊庵氏
松田清藏氏
田中新右衛門氏
齋藤庄兵衛氏
水島藤五郎氏
酒井丸之助氏
西畑庄太郎氏
成見泰司氏
增永五左衛門氏
吉田藤兵衛氏
矢島甚之助氏

一八五
一八六
一八七
一八八
一九〇
一九二
一九三
一九四
一九五
一九七
一九九
二〇〇
二〇一
二〇三
二〇四



貴族院議員
杉田定一氏



長 市 井 福
氏 徹 内 武 將 中 軍 陸



員 議 院 議 衆
氏 郎 太 榮 本 山



福井市助役
陸軍大佐野村來雄氏



東京電氣株式會社
社長 松浦 實次郎氏



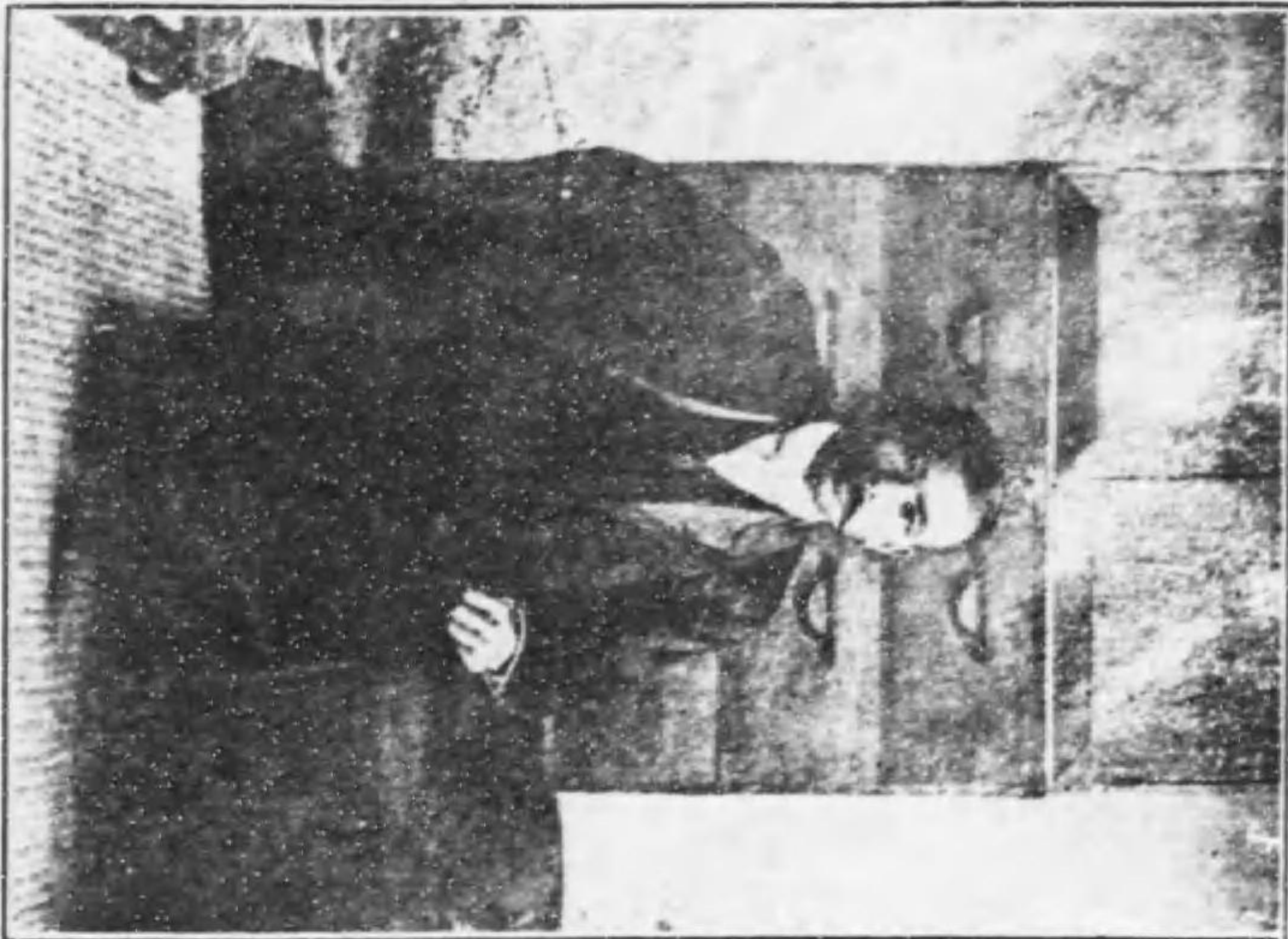
福井日報社
主筆 淺野 一郎氏



多賀山復興會幹事
部山子復興會幹事
多賀山復興會幹事



福井市會議員
松山染吉氏



福井商業會議所議員
大村勇太郎氏



岩峰恒吉氏



員議會市井福
氏恭村竹



長村田池上郡立今員會品會興復山子部
氏門衛左耶治中田



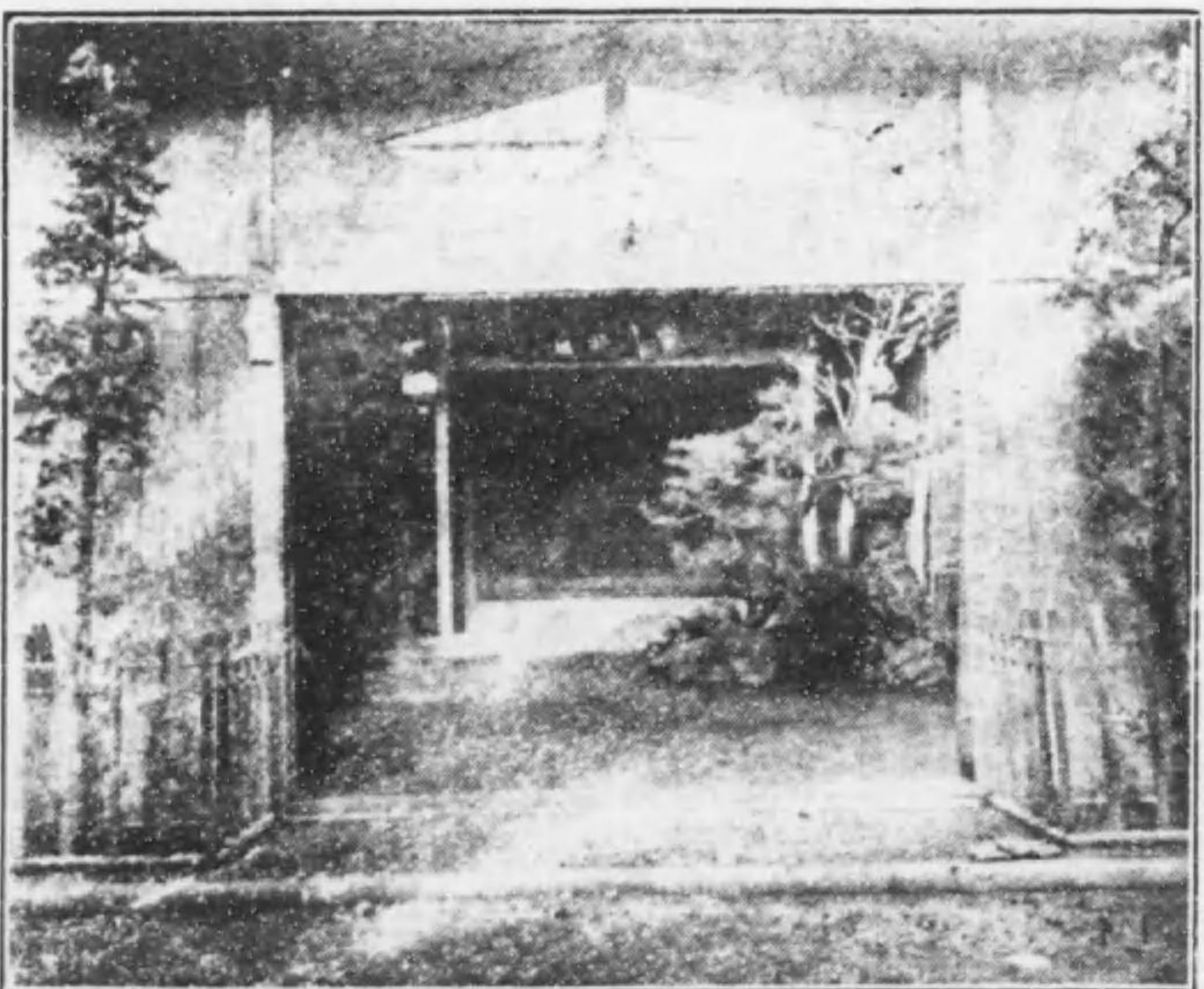
師醫
氏耶太總田岡



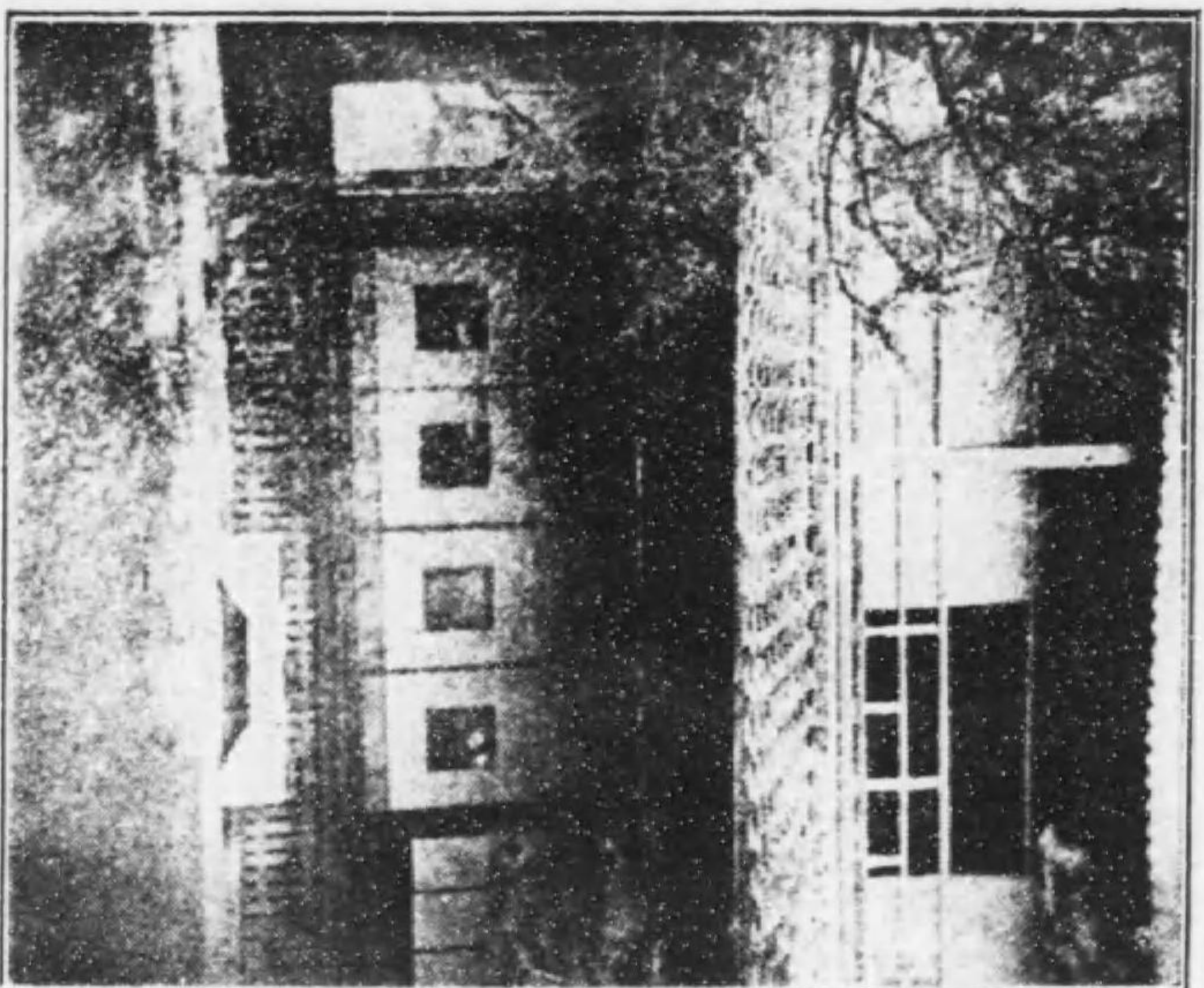
長會分人軍鄉在郷東
氏藏新村松



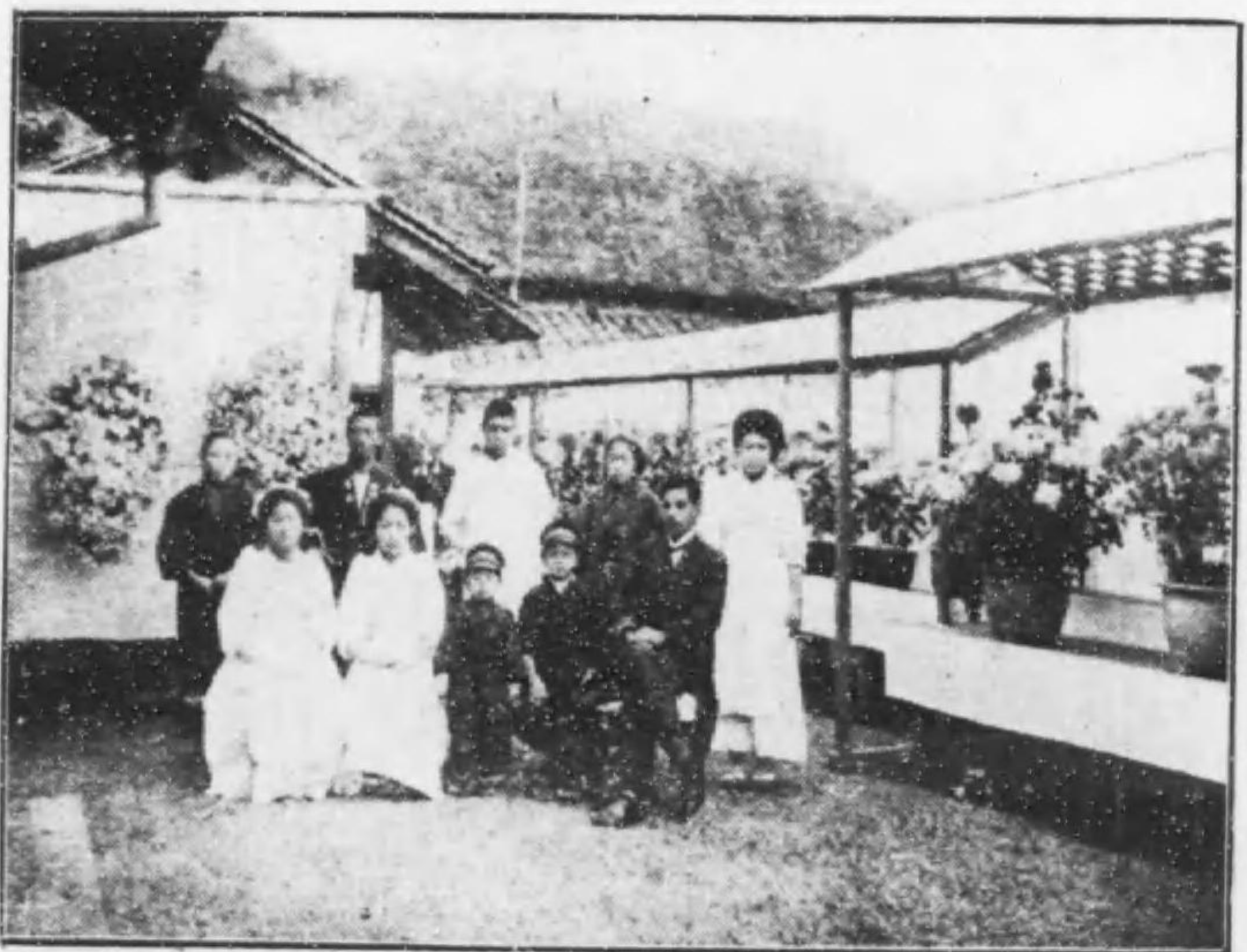
高津與三右衛門
小野頭氏



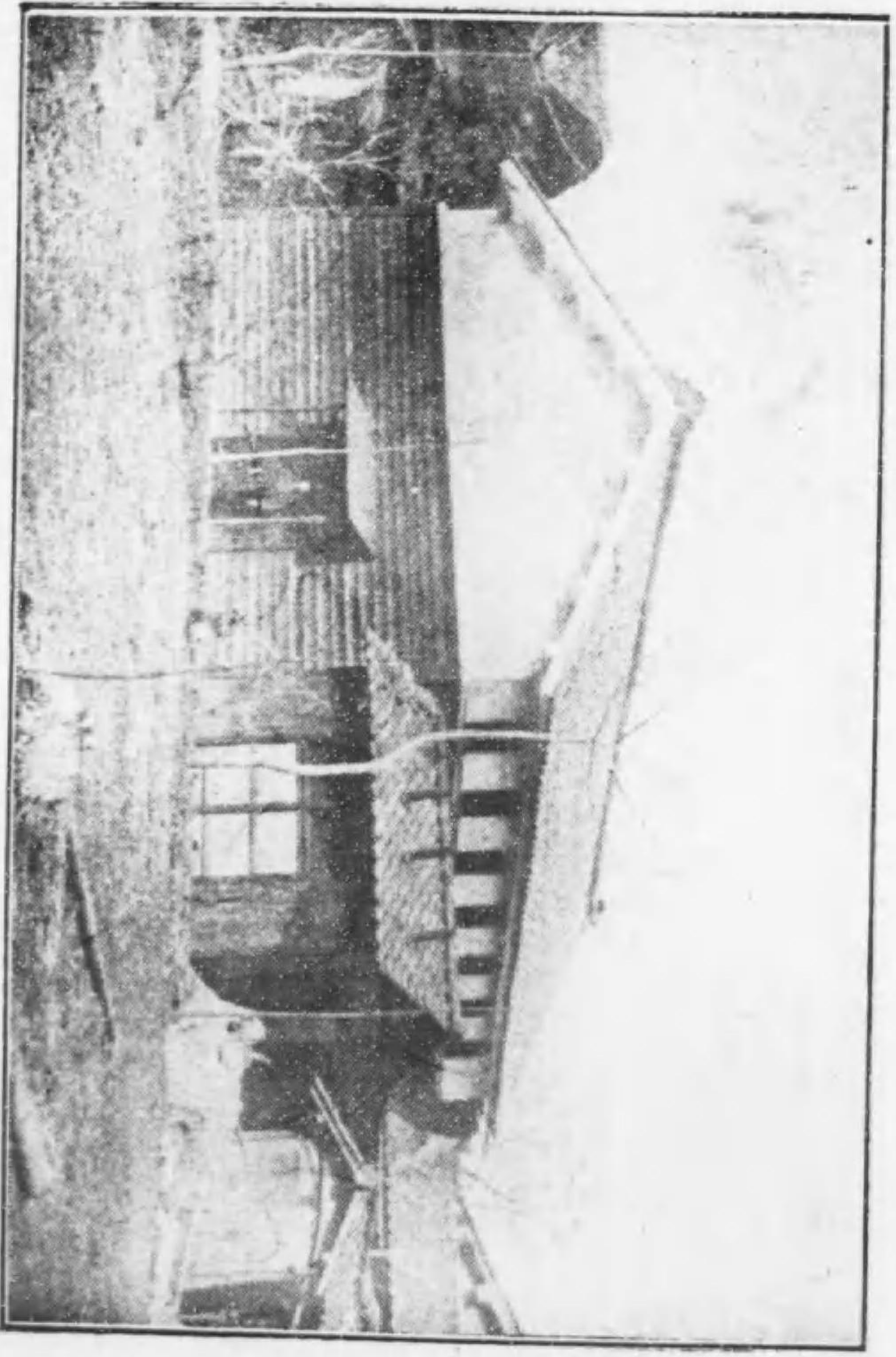
小田利吉氏邸



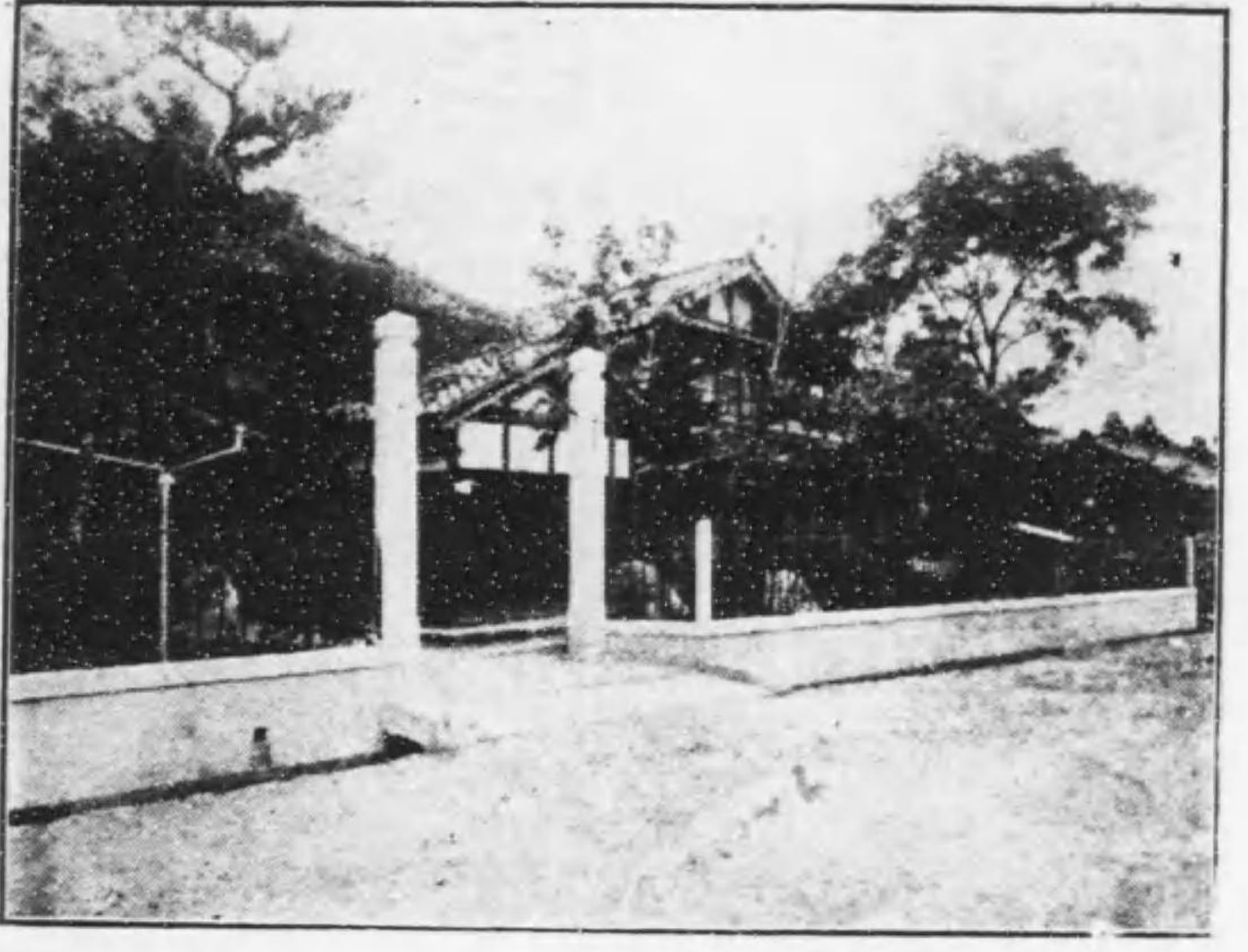
寺尾氏邸



醫師 清水春松氏の菊花園より
長水氏 清水君二男成美君と看護婦及事務員



所造製鏡眼の氏門齋左五水増



師 醫 水 清
邸 氏 松 春



邸 氏 門 齋 右 間 田 吉

杉田定一氏

我が憲政創始の功勞者にして、又我が憲政擁護の殊勳者たる鶴山杉田定一氏は、明治十年板垣退助氏と共に愛國社を再興し、憲政創始の運動を開始して以來、具さに人世の苦楚を嘗め、輟輟不遇茲に四十余年守操益々堅く創業と守成と兩つながら之を全ふして今尙憲政の爲めに奮戦力闘するもの唯た一人の杉田定一氏あるのみである。其清節、高風、現代稀に見る所なり。

氏は嘉永四年六月二日を以て、越前の國坂井郡波寄村に生る、幼名は鶴吉郎と稱し、仙十郎翁の長男である、年甫めて十歳、三國瀧谷の住職道雅上人に漢字を習ふ、十三歳にして左傳史記を讀み、十四歳にして大學に進み十五歳の時まで其許に在りて孫子吳子の兵書を學ひ通鑑を讀む、後年定一氏が議會に於て海軍改革論を絶叫して其博學多識なるに驚かしたのである。十六歳の時福井儒者松井耕雪

の門に入る耕雪門下に渡邊洪基、齋藤修一郎、栗塚省吾等を出す、十七歳の時福井藩儒吉田東蓑の門に入る、東蓑門下に有名なる橋本左内を出す、明治元年、年十八歳にして大阪に出て理學校に入り蘭人につき理化學を學ぶ、二十歳より二十二歳の時に至り東京横濱に出て、英語、獨逸語及び物理、化學を學び更に政治學を研究す、二十三歳にして學を罷め郷に歸臥するに至しなり、初め三國の増道雅は十歳の鶴吉郎を一見して、その凡ならざるを認め、孟子の「天下一に定まらん」より取つて、之に定一の名を授けたのである。

氏の家は由來大庄屋を勤め、慶長三年豊太閤か檢地するに方り、奉行伊藤丹後守か認めた所謂水帳寫しに據れば、同家所有の田地は當時既に千百五十七石一斗三合、此反別八十二町八反八畝一一を算し、外に山林幾百萬歩を有する越前第一の豪農であつた、爾來春風秋雨三百年、連綿として相繼ぎ相承けて今日に至つたのである、氏は少壯より憲政の爲めに戦ひ、家を忘れ、身を忘れ、死生を度外に置

ぬ、東奔西走し各地に遊説し明治八年同志と共に采風新聞を發行し熾に自由民權の大義を鼓吹して新聞紙條例に觸れて獄に投下された、成嶋柳花、小松原英太郎、末廣重恭、箕浦人等の諸氏も亦罪に問はれて此に在り故に獄中多士濟濟にてあつた氏は此の獄中生活に於て、新聞紙條例改正案を起草し、出獄後之を元老院に提出し、次て明治九年、國會開設の建白書を元老院に提出するに至つたか、當時一議官か言を左右に託して容易に受領せざりしに拘はらず、氏は幾十回となく元老院に出頭し、辭色を勵して迫つた結果、有繫に元老院も氏の根氣強きに辟易し遂に之を受理するに至つたこと、當年杉田氏か、百敗屈しなかつた元氣は、此一事を以て見るも想像するに難くはない、蓋し之れ國會願望の嚆矢であつたのである獄を出つるや、氏はまた評論新聞社に入り、社長海老原穆、小松原英太郎、宮崎八郎、池松豊記氏等と侃諤の論を載せて天下の耳目を驚倒せしめて、當時同社は世人より自由民權論者の巢窟として目せられて居たのである、此の時、西郷南洲

將さに薩南の健兒を提げて起たんとする風聞を傳へ、政府の密偵右往左往して、人心轉た恟々たるの時筆を投して遙に西郷黨に應せんとして兵を東北に擧げんとせしも志し成らず、去つて板垣と議りて愛國社を再興せんとして遊説の途に就いたのであるが、同志の小松原英太郎は政府顛覆論を草して禁獄三年、社長海老原穆は大西郷と通謀したる故を以て拘引され、宮崎八郎は慷慨淋漓たる熱血論文を起し協同隊に加擔して各地に奮戦し西郷黨の没落に至るまで奮闘戦死した勇士である、又以て當時新聞記者なるもの、意氣か、如何に熾烈であつたかを知るの一資料となすべきものである。明治十一年秋九月氏の二十八歳の時同志と大阪に會し愛國社を再興するに至りしか十一月評議時代の策禍によりて東京に護送せられ石川島監獄に投せられたのである。氏の資性恬淡寡慾たるは、氏が遊説途次土佐に容たること數閱月、此時板垣の請ひによりて、地方の青年義塾に漢籍を教授して居たが、謝金を贈るも敢て受けず、而も身に纏ふ所は、垢染み緯經破れて、所

々綿を吹くも敢て意に介する所なし、學生大に其風格を慕ひ、久しく止まつて土佐の士氣を鼓舞せんことを希望せしも、事情止むを得ざるを以て、再遊を約して亦遊説の途に就いた、發するに臨み、板垣は権色の羽織をつくりて、之を氏に贈つたと云ふ此事以て證へすしてある。蓋し此の粗衣粗服また之を見るに忍ひなかつたてあらう、當時杉田家は越前第一の豪農にして、家に在ては飽食暖衣意の如くなるべきに、粗衣粗食、天下に放浪して國事に奔走す、古今得難き國士であると同様の安岡直太郎氏をして感歎之を久うし、歸るに及び之を板垣に告げ、板垣も大に驚倒し之より鶴山杉田氏に對する信任愈々厚きを加へたと云ふことである氏か此の間は實に波瀾曲折の多かつた時代であつたのである。

氏の事業を傳ふ事に分りて特筆すべきは愛國社の創立と相前後して起つた、杉田父子の地租改正問題に關する努力の顛末である、明治九年六月地租改正の詔勅があつた、舊幕時代に於ては、檢見して年の豊凶により地租を定められたか、同年

に至り之を一定せよとの詔勅が降つて、石川縣權令桐山純孝は政府に媚ひて、不法にも人民の上申によらず、政府の見据を以て定め、乃ち越前七郡は一反歩一石四斗と云ふ見据を御受けして村總代を呼出し之か承諾書を差出すべく嚴命したのである、此時杉田父子は徹頭徹尾官權に反抗し、之れ縣民の一大事、子孫興亡の岐るる所であると謂て、斯の如き不法の見据には屈從すへからずとて、縣廳に政府に之か再調の請願をすること幾十回に及び、明治十三年にして杉田父子の運動漸く其功を奏し、再調の結果、地租に於て二分五厘積算、八万八千九百六十四圓六十一錢三厘を減し更に誤謬の反別も亦訂正せられて、一千二町七反一畝二十五歩を減した一方には地租を減し一方には反別を減せらるゝに至つた、仍て福井縣民は初めて杉田父子の爲に蘇生し、子孫永く父子の恩恵に浴することとなりされは福井縣民は其徳を不朽に傳へんか爲に、福井城外赤坂に地を相し父子の頌徳碑を建てたのである、

之より杉田氏の信望益々に天下に高く、國會期成の願望には、縣民を擧げて悉く之に調印し、鷲山をして衆議院に送るもの前後九回の多きに及ぶ、杉田氏か福井縣下に於ける勢力は、此時に於て既に確固不動の地盤をつくり上げられたのである。

明治十四年氏か三十一歳の時、板垣退助、河野廣中、星亨、大井憲太郎と共に自由黨を組織して黨務擴張に努力大に致す所あり、明治十七年支那に着眼し、四百餘州を踏破して以來、對亞細亞問題に就て深慮研鑽すること茲に三十有餘年に及ぶ、今尙老軀を提けて、各種の會合に萬丈の氣焰を吐いて對外政策を論ずる所、颯爽たる風貌、勃々たる元氣は、朝野の少壯政容を凌ぐの慨あるを偲はしめる、蓋し杉田氏か國事の爲めに、晩年の勇を鼓舞するのは、憂國の至誠、衷心禁する能はさるか故である。明治十九年の夏米國に航し、次て英國に遊び制度文物の視察を爲す、明治二十一年氏か三十八の歳時巴里に遊び、更に大陸を周遊し、同年夏

歸朝するや、擧げられて縣會議員となる、明治二十二年二月十一日、福井縣會議長の資格を以て、憲法發布の大典に參列するを得た、鴉山父子が、私財を投じ、身命を賭して奮闘した多年の宿志は、此時に於て漸く希望の光を認むるに至つたその満足察すつきてある、時に氏は三十九歳、

明治二十三年七月、第一期の總選舉に於て、大多數を以て福井より選出せられ明治三十一年七月北海道長官に任せられ從四位に叙せらる代議士たること九度此の間院内にありて政務委員たり全院委員長に當選せり明治四十五年に至つて、貴族院議員に勅選せられたか、其間明治三十六年には副議長となり、三十九年には議長に擧げられ、鴉山の聲望益々天下に重からんとす明治二十五年十二月の第四議會に於て、江原素六氏と共に河野廣中外、五十六名の賛成を得て宿昔の主張たるかの有名なる海軍改革の建議案なるものを提出した、即ち氏の主張は、海軍行政を改革して政費を節減し、以て國防費に充當すへしといふにあつた、氏の海軍改

革建議案は總論總へて九章より成れる大文字で、一一時弊に適中し海軍當局をして顔色なからしめた爲に當時或は、鴉山を以て海軍大臣に擬する者もあつた、果せるかな此改革案は自由黨の政策として、竟に政府の容るゝ所となり、日露戦争に於て、空前の大捷を博し、以て國威を八荒に耀すに至つたのは、朝野の齊して其先見に服する所であつた。

内に憲政を樹立し、外は對外政策を確立し、以て、國家百年の大計を劃せんとは鴉山か愛國社創立當時よりの主張であつた、而して氏か海外に航すること前後四たび、支那に遊ふこと二回韓山滿野に遊ふこと一回歐山米水に嘯ふこと三回に及んでゐる、就中二十九年及ひ越へて三十三年には絹織物取調へのために、歐米各國を歴遊して歸つたか、その頃二十萬圓内外の製産能力しか有しなかつた福井の機業をして、克く今日の四千萬圓に昂上せしめ、今や海内唯一の機業として名聲四海に布くに至つたのも、皆その賚であると言はねはならぬ。天下を取るか首を

取らるゝかは、氏か當年の境遇であつたと言つてよからう、實にや鶴山をして斯くも内憂なからしめ、一意國事に奔走せしめたのは、固より父仙十郎翁の指導感化の力興つて多きに居るとは言へ、故夫人すゝ子女史か内助の功も亦決して空しく没すへからざるものがある、

令夫人すゝ子女史は、藤四郎氏の令妹にして、女史二十歳の妙齡を以て鶴山の杉田氏に嫁いたのは、明治十七年夏七月のことであつた、新郎は越前第一の富豪にして當代の國士、新婦は、金權一世に盛んなる藤田家に人となり楚々たる少女時は、お茶の水女子師範學校に優秀の聞へ高かつた淑徳才媛であつた。

清節四十餘年、杉田氏をして、政界の名士、帝國の大平民として、異常なる色彩を發揮せしめたる其半面には、すゝ子夫人の力か、如何に居るかを知ねはならぬ況んや後年地方問題の爲め、福井の機業發展に努め、北陸鐵道の建設、九頭龍川の治水に力を盡したのも、又だ三國鐵道の建設に關しては、渾身の努力を致し敦

鶴線は、今正に之か建設に着手せしめ、敦賀築港を完成し、浦蘆との航路を擴張して、世界交通の大關門たらしめたのも、皆一に夫人内助の功多かりしと傳へられてゐる、嗚呼この賢夫人、幸少く、鶴山の晩年の功業を見ることなくして、大正五年六月二十六日、病の爲めに逝く、氏は又憲政の創始者である憲政確立に就ては、現代黨人中の功勞第一者である、憲政黨内閣の成立も鶴山か政黨合同を大成したによつての副産物である、第四次伊藤内閣の出現も鶴山か明治三十二年伊藤博文の北陸漫遊に際し、之を慫慂して立憲政友會を組織せしめたによつて、出來たる産物である政友會にありては總務委員たり政友會幹事長の職に在りて黨勢の擴張に努力すること舊の如してある。大正四年御大典に列して叙勳三等瑞寶章を賜はる、大正三四年の功により旭日中章を賜はる時に年六十六歳、知らず鶴山杉田氏の志は、天下國家に在つて、一身の利害榮辱にならざることを、餘生を捧けて、憲政國の大平民となつて、黨人の模範を後世に垂れんとするは、正に氏の

理想であらう、さても我が憲政の一大恩人として崇敬すべきものである。

竹内徹氏

氏は現に福井市長として傑物の定評世既にあり、慶應三年五月福井縣足羽郡木田村に生る武内新之助氏の第二男なり、家は累代農を以て業とせり、幼にして卓犖不羈、且學を好み漢英數の諸科を郷里福井に修學し、長ずるに及び軍人たらんことを望み、士官學校を抜群の成績を以て卒業し明治二十年七月二十一日陸軍工兵少尉に任官し、同二十一年七月二十八日陸軍士官學校工兵科を優等にて卒業し、同日工兵第四大隊附となる、同二十三年十月十五日正八位に叙せられ同十一月十

日陸軍工兵中尉に、同日工兵第三大隊附に同二十五年一月二十七日從七位に叙せられ、同二十七年八月四日陸軍工兵大尉並に正七位に叙せらる、同年十一月六日明治二十七八年の戦功に依り功五級金鷄勳章年金及び勳六等瑞寶章を賜はる、同二十九年三月抜群の功績を以て陸軍大學校卒業し同年五月參謀本部出仕同年十二月二十四日陸軍大學教官に兼任し、同三十二年十月二十八日陸軍工兵少佐並に從六位に叙せらる、同三十三年五月奧國に差遣され軍事研究として同國に駐在仰せ付らるゝに至る、同三十四年十一月勳五等瑞寶章を享け奧國歸朝後參謀本部員に任せらる、同三十六年十一月陸軍工兵中佐に昇進、同三十七年二月線區司令部動員下合同日線區司令官に、同年三月大本營陸軍幕僚に、同年五月野戰鐵道提理に同年八月陸軍工兵大佐に、昇進從五位に叙せられ勳四等瑞寶章を賜はる、同三十九年四月明治三十七八年の戦功に依り功三級金鷄勳章に年金及勳三等旭日中授章を賜はる、同四十年四月野戰鐵道提理部復員及び第一師團司令部付被命更に參謀

本部付被命、同年十一月陸軍大學校兵學教官を兼任され、同四十一年八月正五位に叙せられ、同四十三年十一月陸軍省軍務局工兵課長に補せられ、同年十二月林野整理審査會委員並に東京市區改正委員に、同四十四年一月日本大博覽會理事官に同年二月陸軍無線電信調査委員に、同年十二月參謀本部第三部長並に鐵道會議員に、同四十五年一月港灣調査委員に任命され、同年二月十四日陸軍少將に昇進大正四年八月從四位並に勳二等瑞寶章に叙せらる、同年十一月大正三、四年の戦功に依り旭日重光章及年金を賜はる、大正五年八月陸軍中將に累進し、交通兵團長臨時軍用氣球研究會委員並に鐵道會議員に陸軍無線電信調査委員長に、同七年八月浦潮派遣軍司令部付に同年九月野戰交通部長に、同八年三月聯合國軍事輸送委員及び同部長に、同年七月參謀本部附に各任命さる大正九年四月依願豫備役となり、同年五月正四位に叙せられ特旨を以て位一級を進めらる、更に大正九年十一月大正四年より同九年に至る戦功に依り功二級金鵄勳章年金並に勳一等旭日大

授章及び一時金若干を賜はる、人格圓滿にして勤直なり、人と接して城府を設けず、温容人をして畏服せしむるに足る、氏は大正十年六月四日福井市會全員の推舉する所となり福井市長となりて市政に執掌しつゝあり、氏は更に福井商業會議所議員選舉委員を兼ねるに至る、今や官民の間に評判よく、到る所に噴々の聲望を博してゐる。

山本條太郎氏

衆議院議員山本條太郎氏の如ききは吾が實業界の一大重鎮たるのみならず實に亦現代政治界に於ける唯一の泰斗者である、幼にして豁達慧敏を以て鳴り、氏は越前福井の出身にして年僅かに六歳の時東都に上り苦學十年遂に普通の學を修むる

に至る、長ずるに及び三井物産に入り、恪勤精勵爰に三十幾年儕輩を抜き以て一家の信望を得、頭初三井汽船の船員となり英人船長に就き傍ら英語を學修して能率を増進し遂に三井物産の上海支店の事務員に昇進するに至り、更に本店、大阪支店副支配人を歴任して上海支店長に漸次累進して再び上海に至る、此の時氏が一流の手腕は斯界に認識され以て名聲を擧ぐるに至る、是より先き氏は大阪支店副支配人たりし時米國に遊ぶこと約一年餘にして歸朝し、其地の制度文物の視察を爲すこと深くして大に智見を博め斯界に裨益せし所亦尠からずと云ふ、氏は爰に人生行路の辛酸を嘗め盡して百方自立の道を講し漸次世の信望を得て理事に陞進されしは明治四十年にして而して三井物産の實權を掌握するに及びて今日に至りし人である、氏は頭腦明晰、用意周到にして機略縱横である、然も仁俠に富む所ありて衆人の敬慕従つて尠からず、氏又學殖あり、識見あり、就中支那語に造詣深かく、明治二十六七年頃より支那に往復頗る多く、支那通として其地人の間に頗

る信用を博し、明治三十七八年の日露戦役の際氏が暗中飛躍、旅順方面へ糧食輸送の功果の如き正に公使以上の手腕ありと賞揚されたのである、三井物産が今や支那に於ける偉大なる勢力は氏が努力の大なるより胚胎されてゐるといはれてゐる、氏が斯界上に於ける経緯は凡て公共的である、彼の山口縣の民間事業として囑望されし火藥製造所に對し多大の後援を寄與せし一事以て知るべきのみ、之れ氏が歐洲戦争の經驗に徴し國家的概念より武器彈藥の國威上必要なるを焦慮せし餘なされたる愛國的美徳の發現である、況して水力電氣事業、鑛山事業、亞鉛製煉事業、其他多くの文明的事業に對する氏が精勵は一として公共的ならざるはないのである、今や獨力事業を開始し事務所を東京驛頭に置き更に縱横奇略の活躍を爲してゐる當代實業界の俊傑山本條太郎氏は獨り、我が日本内地のみならず滿鮮を越へ支那大陸に及び遠く南洋に伸びんとするに於て氏が抱負の如何に大なるかを察知せらる。

大正九年の総選挙に際し福井市より推されて立候し福井の猛者松井文太郎氏と逐鹿場裡に雌雄を決し奮戦大に努むる所あり之を一蹶し以て當選の榮を擔ふに至りて爰に政治界の人となる、氏が郷里に於ける徳望は以て知るべきなり、今にして僅々三ヶ年の星霜を積みしに過ぎざるに馳名斯界に噴々たる雷の如く、是れ氏が過去三十餘ヶ年に養はれたる資ものも其の一なりと云ふべし、現に籍を政友會に屬し本部の政務調査委員となり黨勢の擴張に銳意して怠らず、其前途を囑望され一黨の人氣を一身に背負つて居る、氏の前途は甚だ洋々たるものがある、氏の頭腦明晰は言ふまでもなく、識見手腕も相當に冴へて居るが、氏が俄然斯界に重きをなせる所以は他に存するのである、氏は體軀魁偉にして堂々たるが如く其態度が常に正々堂々として王者の陣を行ふの觀がある、特に不眞面目で小利巧な政治家の調法が、現代に於て氏は飽まで謹嚴、飽まで眞率である、氏は何處までも健實である、一派煽動政治家が一意時流に迎合し一時の虛名に快哉を叫ぶやうな

淺薄な政治家にあらず、氏は自信の前に名利を一擲するの氣概あり、主張の前に千萬人を敵として怖れざるの勇氣がある、氏は民衆に迎合するよりは一世を指導するの氣魄を有つて居る、こゝに氏の生命あり亦價值があるのである、其議政の談論風發は、尾崎、永井氏に及ばずと雖も氏亦一種辯論の雄たるを失はず、特に言ふ其肺腑より迸出し一脈の生氣と一種の重力とは能く人を壓して敵をも謹聽せしむるの力がある、氏が今四十五議會に食料品配給に關する建議案を提出し物價調節に關する當局の施設を難し、國民生活の改善竝に衣食住費の輕減は我が國焦眉の急務なりとし、此等の目的を達成する爲に實行容易なるは冷蔵庫、冷蔵船、冷蔵車等の如き食料品配給の設備を助成せしむるに在りと縷々數千言を獅子吼して政府に肉薄し以て初志を貫くが如き、偶々以て氏の自信に忠實にして時流に媚ひざる達觀的な眞本領を窺ふに餘りある、氏は確に棟梁の器たる天分を有して居る、氏の天分は懸て宰相となりて一黨を率ゆるの時機方にあるべしと期待され

てゐる、又私人としての氏は、亦頗る美点に富んで居る、人に依つて態度を二三にせず、謹嚴胃し難き間に一點掬すべき情味を宿して居る、且つ寛容にして能く人を容る、而も氏は得意に傲らず、矢竟に泰然たる所眞に當代の珍とするに足る氏たるもの須く自重して可なりである、氏の邸は東京赤坂區新坂町の石門ある宏壯の洋館が即ちそれである、資産方に六百萬圓と註されてゐる、其所有者が奇傑現代議士山本條太郎氏其人である、於茲筆者は氏の健康を祈る。

義江民治氏

福井縣會議長福井市會議員醫師義江民治氏は同縣足羽郡東郷村の出身である、幼にして周儻不羈豪宕を以て鳴り、其小學に在るや奇行縱橫教師の膽を抜く、併も

成績常に一級の首席を占め郷黨稱して神童となす、福井中學に普通學を修め卒して高等學校に入り卒業後雄志滿腔東都に上り、東京帝國大學醫科大學に斯學の蘊奥を造詣し、明治四十三年好成绩を以て同校を卒業するに至り大正元年福井市佐佳枝中町に於て醫業を開始するに至つたのである、其の手腕と識見は直ちに群を抜き噴々たる聲名を揚ぐるに至りしなり、大正八年福井縣會議員の改選に際し奮戦大に努むる所ありて其功空しからず遂に第一位の得票を以て當選を爲すに至り縣政界の利者として縦横の快腕を揮ひ、其の明快なる識見は正に縣政界の一異彩として見るべきものが多大である、越へて大正十年福井市會議員に當選し、更に福井縣會議長に推舉されて現に其の任に在り、在福十年、既にして今日あるを得たる氏の如き、方さに新人の擡頭として趣興の深甚なるものがある、是より先き指を事業に染むるに至り福井製氷株式會社の創立に參畫し功成るに及び之れが社長として其の重任に當り同社の發展に銳意して盡功あり、其他大小會社に關係す

る枚擧に違あらず、氏又頃日福井市の囂問たりし舊福井監獄敷地及壕の埋立等を一身に擔し着々之れが竣工に單身出て工役を指揮し月余にして大に見るべきものを致し、今や同所は急轉機變暗夜に明星の体をなし既に公設市場の新設等を以て賑ふに至り彼の福井一たる神明神社の祭禮の如きも此の開拓を以て更に一段の異彩を添へ而して地方の繁盛の招徠に努め貢献又尠なからずして信望更に厚きを加ふるに至る、氏又赤十字病院赤坂新設に關し鷺田、松山、竹下安田諸氏と共力大に努むる所あり以て同地方部民仰合敬慕する所多く、人爲潤達にして膽略あり、併も一面温良の君子人にして其風格誠に欽羨すべきものがある。

安本吉次郎氏

福井市會議長安本吉次郎氏は滋賀縣大津市の出身、福井市佐久良上町の人、幼にして既に滿服の霸氣あり、青雲の志勃々として止み難き氏は明治二十年頃驪然郷關を辭して絹織物の本場たる越前の福井に負笈したのか今の位地を贏ち得た氏には忘れ難き經路の第一歩であつたのである、才氣充滿の氏は森田村の籠田俊次氏の邸に遊ひて間もなく横濱に走り外國貿易商店に恪勤精勵大に智見を博むる所あり、此の間三ヶ年余にして再び福井に入り某商店に碎身的勤勞を通し爰に主家の信望を厚くし明治二十三年頃獨立して羽二重絹糸業を開始し以て今日に至つたのである、氏は又峻嚴眞摯な氣概か進つてゐる、處か氏に又不幸相續いて商勢更らに揮はす四邊の融通殆んど停止し追かの氏も中宵夢破れて寤寐られぬ夜か多かつたか、百折不撓の意氣は方に一面の血路を拓き、此類勢挽回に日夜苦慮の余、漸次其の巨手を八方に伸延し、多年洗練されたる斯界に於ける經驗と非凡なる奇才とを以て、飛躍的努力を試み商勢頓に著しく興隆し、縣下屈指の發展振を見せ以

て斯界に重きを爲すに至りて巨萬の富を積んでゐる、更に氏は各種會社の創立に參畫し福井精練會社の重役を初めとし、福井絹織物同業組合代議員議長、福井燃糸染工株式會社長福井絹糸倉庫株式會社取締役となり、拮据經營次第に其の頭角を顯し名聲隆々として揚る、一面又市の公共に盡瘁する所少からず、大正十年福井市會議員の改選に際し滿場の推舉を受け當選して更に市會議長の榮職を贏ち得て推戴さるるに至る、其現時關係せる實業會社に在りては縣内外を通して數ふるの煩に堪へざらむとすといふ、氏の如きは福井縣實業界の泰斗たるのみならず福井市政界の一大重鎮とすへきてある。

池田七郎兵衛氏

池田氏は福井縣の僻陬足羽郡酒生村荒木新保の人縣下屈指の豪農たり氏は夙に志を政治に潛めて識見頗る高く中等教育を郷に卒へるや、治政經濟の學を東京に學び、歸るに迫り九十一銀行に入り、現に同行の頭取、福井縣會議員である、氏の經營する九十一銀行が過去六ヶ年に驚くべき一大進展は資本其他の關係にも由るへしと雖も氏か精勵苦心一意行運發展の努力に負ふ所大なりと、氏は我が縣下財界の權威者たると同時に又政界の中堅人物である氏の信望又大なりと云ふへし氏は如何なる人にも城壁を設けず、如何なる人にも好く談し、意見を發表するに躊躇せぬ、然も氏は機略縱横、眞に宰領たるの才を有し、如何なる事に對しても大膽である、誠に池田氏の前途は甚た洋々として春海の如きものかある、氏は頭腦明晰で、識見手腕も相當に冴へてゐる、氏の體軀魁偉にして正々堂々王者の陳々行るの觀かある、氏には些かの衒氣なく至つてジミてはあるか何處までも健實である、氏又時流迎合に叫ぶやうな淺薄な政治家ではない實に一世を指導するの氣魄

を有つて居る、こゝに氏の生命かあり價值かあるのである、籍を政友會に置き郷黨に最も其前途を囑望せらる、一黨の人氣を一身に背負つて居るも故ありと云ふへし、曩きには福井縣會議長の椅子に凭りしは人の知る所である、人爲僥倖磊落然も一度事に際會せは固く主義主張を持して一步も人に譲らす常に黨勢の擴張に熱心誠實にして曾て倦むを知らず、以て郷黨に重きなされつゝあり、又以て現今の政界、經濟界は共に氏の如き人物に俟つべきもの益す多きを加へてゐる、私人としての氏は亦頗る美點に富んで居る、其の謹嚴冒し難き間に拘すべき情味を宿し得て羨望さる。

笹原清氏

現代議士山本條太郎氏の秘書役笹原清氏は福井縣坂井郡本莊村の出身なり、氏の家農を以て業と爲す一郷の舊家たり氏は幼にして穎悟頗る學を好み中等の學を郷里に卒へるや身を教育界に投し數年にして斯界に貢獻せし所尠からず、明治四十年郷關を辭して東京に出て、東京市内の尋常小學校訓導として陰忍し將に來る英才を教育するを畢生の快樂として始終し、氏が独自の奕彩は聽て儕輩を抜いて校長に簡拔せられて令名あり、後ち故ありて辭して操觚界に入り東京實業の日本社に縦横峻辣の手腕を揮ふて天下の人心を驚愕せしめ、氏は又文章に堪能て、一度筆を呵せは達意情暢、彩華妍爛な文字か立ち地に並へられる、從つて信望同社に溢れ直ちに同社廣告部長に進級されて異彩を放ち大正九年山本氏に聘せられ入りて同氏の秘書となり以て今日に至りし人なり、人爲寛祐、豁達、情誼に篤く、夙に郷黨知友の間に重きをなされつゝあり、今や山本家には無てならぬ人才として遇せらる、氏は又愛郷心に厚く、常に郷黨後進の誘導扶掖に盡すところ少からず

其の至情は切に人をして感激の泪なきを得ないものかある、我郷黨の先輩からすと雖も氏の如きは又多く比儔するものかない、蓋し氏か今日の聲名あるは偶然にあらざるなし、年未だ四十垂々として少く大に嚮望する所あり舉世滔々に輕佻浮薄の徒多からんとす今日氏の如きを見る大に意を強ふする所である。

河崎清氏

現代議士河崎清氏は福井縣遠敷郡の産大畑岩次郎氏の令弟なりしか福井縣三方郡耳村河原市河崎家の養子となり、代々農を以て業とし來りし家にして同地方に於ける舊家を以て名あり而して氏は政界の人たるのみならず、福井縣下事業界の泰斗たり、曾ては村郡名譽職の任にありしこと數次、此間郡村制の改善進歩に貢献

する所頗る多大、曾て氏は公共に意を寄すること厚く移民事業に熱中し同郡内より米國哇布等に移民せしこと約そ一千人余に迄へりといふ、大正七年には耳川水力電氣株式會社を創立し社長として之に任し、其他南越電氣、河野水力電氣、岡山、朝鮮に於ける電氣會社の創立に參畫して各其重役となり、池松知事時代には福井地方森林會議員となり福井縣山林會の創立に多大の力を致せし人なり、尙九州電氣軌道株式會社の重役となり、其他の名譽職公共事業等苟も氏の名を列せざるはなく、亦氏の名を列せずむは成らず、其他關係せる實業會社に至りては數ふるの類に堪へざらんとす、而し氏又創思に富める讀書家なり、併も其輕快なる風姿は人をして好感を齎らしむ、此氏今や衆望を負ふて福井縣代議士として中央議政の人となり活躍侮るへからざるものあり、以て慶すへきてある。

森 慎一郎氏

—(30)—

醫學士森慎一郎氏は福井縣大野郡勝山町に明治十七年二月を以て生れし人其小學校時代明治二十九年四月勝山町の大火に遭ひしを縁に、早より東都に出て修學すること頗る深く、中等學校より大學を卒へるに至るまで終始一貫にして上位を下らず、切磋の功空しからずして優等の好績を以て東京帝國大學醫科大學校を卒業し醫學士の稱號を享け、大正五年一月兵庫縣武庫郡西灘岩屋に於て開院するに至りしものなり、人爲温和重厚の士にして、夙に多大の聲望あり、今や同町刀圭界の第一流者として重きを爲し、又現在の所に宏壯なる醫院を築造して著しき盛況を招來してゐる、氏の人格才幹方さに僚星の間に燦然たるものかある、又以て氏に嘖々たる聲名ある所以である。

大村 勇 太郎氏

—(31)—

氏は福井市九十九町の人、福井縣足羽郡六條村大町の農家に生れしものなり、氏又鋤鍬を執るを好まず、明治二十九年春負笈して東都に出て、初め英漢數學の私塾に學ひしこと年余に及ひしか學費の都合氏をして退塾の餘義なきに至らしめ後ち月幾圓かを受くる鐵道院の雇となり、腰辨茲に七ヶ年余に及びて同三十七年一躍判任官の地位を占むるに至り、此の間に於ける氏の艱難苦節實に名狀すべきもの多かりしと言ふ、堅忍持久に富むの氏は日露の役後擢んせられて、當時の鐵道院總裁後藤新平男の統轄する滿鐵株式會社鐵嶺に煙台保線の主任として馳するに至りて、勳功あり、滿鐵の爲め貢献すること頗る甚大にして爲めに數千金の報償を受けしことありといふ大正二年職を辭して同地に魚業を試みし所ありしか故ありて日本なる故郷に歸り今日に至りしものなり、支那に苦節せしこと約十ヶ年に迄

ふといふ、氏は又言動治發にして且生氣あり清廉潔白の人なり、同志の間交り厚く従つて上下の信用漸く深かきを加ふるに至り而して業を嗜好の骨董に拮据せり彼の西郷従道翁の令息候爵西郷少佐を初め第十師團金久保參謀長より更に大谷陸軍大將當時の第五師團長其他の將官佐官尉官等文武官高位の士と親交深かりしを見ても、氏をよく人格の崇高なるを認むるものありとす、大正十年の福井商業會議商議員の改選に際し福井市五百の道具組合員より推舉せられて立候し、當選の榮を擔ひ得たる衆望の氏は當市商業發展の爲め大に活躍する所あるは敢て期待するまでもなしと信するなり。

岡崎利市氏

氏は福井縣坂井郡春江村江留上の産、家は農を以て業と爲せしか氏は夙に實業界に志を寄せ本縣絹織物界に入りしは明治二十三年頃なりといふ、其間幾多の苦節を嘗め今日に迫ひたるなり、氏は先年歐洲戰當時斯業の本縣に旺盛の結果職工の欠乏を感じ生産意の如くならざるに付き一往、邁進更に富山縣下新川魚津町の海濱に一大工場を建造し、ここに二百余臺の機械を据へ、日時を避賑に空うする兒女を狩り集め生産増殖を計り、之れか主任に令弟岡崎與三郎氏をして之れか應援に當らしめて萬事遺憾なきを期し、而して福井縣上村を本工場となし富山縣の魚津を分工場として爰に岡崎合名會社となせしか後ち解散して氏獨立經營のものとなすに至り両工場の機臺合して四百機に近きものなりとは如何に氏によく勤勉努力手腕の深大なるかを想起せしめて止まざるものあり氏又豊富なる資財を有し且つ慈愛に深かく彼の米騒動の發頭地なりし魚津町貧民に多額の金員を土地の有志に率先して寄附して之か鎮撫に努めたりと云ふ又公事に奉するの念厚く其の他罹

災の人を救助し或は公共的寄與をなせしこと再にして止まずして内閣賞勳局及び本縣知事より褒状を賜はりしことあり斯くして世評の益々好評を蒐むるに至りし衆望多き篤志の人なり氏又寡言實行にして自信に厚き人である、既に氏か信望手腕經驗の凡拔するにおいて更に氏の前途に愈々好望を加ふるに至る、ことに歐洲戦後に於ける激甚なる經濟界の巨濤は幾度浚ひつくさんの威勢を描かきたるも其基礎の鞏固はこれ等の脅威に狼狽するものにあらず、實に鷄群の一鶴たる感ありしむ斯くの如き氏は今や福井縣絹織物組合評議員に推薦され現其職に在りて斯界の爲めに盡瘁至らざるなしといふ其他幾多の會社の重役を擔して努力淺からず氏の如きは方に特筆大書に價ひすへきてある

松 下 常 次 郎 氏

氏は福井縣足羽郡東郷村に其の生を享けし人、今時同縣今立郡新横江村下新庄に其の居を構へ絹織物を以て業となせる人なり、氏は亦獨立孤往にしてよく時運を觀るの明ありて時代に準應す、資財豊かにして一郷の信望最も厚く大正九年野尻彌重郎氏發起となりて武生福井間に通ずる電軌鐵道株式會社の創立するに際しては進んで同社に加入し大株主として重役の地位を占め、現今大に同社の爲め努力淺からずと云ふ、大正十一年三月には福井縣會議員の補缺選舉に當り足羽郡有志の推舉する所となり、同候補たりし社村の豪者山田某を一蹴し大多數を以て當選の榮を得たる、氏は來るへき改選には更に一大勇戦を試むべく意氣軒昂たりといふ、之れ自信の上に然るへき歩調なるに於て期待の價值充分なりと見らるべく、敢て氏の自重を祈る。

石田憲三氏

氏は福井の辯護士にして刑事辯護に卓絶し當市少壯辯護士中の堅辯家たり、明治二十二年三月八日を以て東京市牛込區北町に生る、士族理學博士織田顯次郎氏の二男なり、家は舊家にして父君織田氏は徳川氏の旗本織田信義の二男にして明治十二年東京帝國大學出身の秀才にして第一高等學校教授より京都帝國大學理工科大學教授を歴任したる功勳者たり父君は遂に明治三十八年長逝せられたり、この父君に先き立たれし氏は同年福井の士族石田家の養子となりて襲名するに至る、幼より學を好み明治四十年京都府立第一中學校を卒業し明治四十四年第三高等學校大學豫科を卒業し直ちに京都帝國大學法科大學に入り獨逸法律科を學びて幾年螢雪の功を積んで大正四年優位に卒業し法學士の稱號を享たる氏は直ちに京都市に於て辯護士を開業なすに至りしものなり、氏の資性硬直にして言はんと欲する

所を言ひ行はんと欲する所を行ふ、獨立不羈、富貴によらず、威武に屈せず、宛然古武士の風あり、而して人に交はること敦厚にして身を持すること薄く、且つ頭腦明哲論理整然たり、當代罕に見る人格識見を有す、氏は大正六年の秋福井市に轉し續けて同業を開設し熱誠訴訟の依頼に應じ、名聲次第に地方に聞ゆるに至る、氏亦豈富なる資財を有し且慈愛に富む、斯くて信用益々擴大するに至る此の紳士たる氏の今後に期して待つべきもの更に多からんとす。

高島茂平氏

高島茂平氏は福井縣丹生郡立待村下石田の人慶應三年五月を以て其の郷に生る、家は一郷の名門氏祖志の後を承けて賑恤を事とし、又其他の公職に在りては一身

を忘れて公事に盡瘁す、氏は夙に學事に心を用ゐ、明治二十二年四月東京高等師範學校を卒業し直に福井縣尋常中學校教諭に任じ、後ち丹生郡會議員、福井縣會議員に選ばれ縣政に當ること數年に及ぶ、又福井銀行取締役、所得稅調查委員、宅地價調査委員等に推舉されしこと數次功績頗る顯著なるものある、氏は日本赤十字社又は教育會に努力淺からずして、明治四十年五月帝國教育會より教育功牌を受けしを初めとし本縣其他より數回の旌表を受け、全四十二年六月赤十字社より有功章を贈與され現に福井支部商議員の位置にあり、又丹生郡教育會長としてこの氏は全二十八年四月より連綿として一貫し今日に及び現に其の地位に在りて貢獻頗る厚く名聲の藉甚たるものあり、質性温厚篤實にして併も謹嚴冒し難き所あり亦人に接觸頗る厚く温情の流進たるものあり、氏は又一面政治的色彩を帯へる人にして憲政の完美を期せずむは己まざる底の人物なる、明治四十五年五月郡部より選ばれて衆議院議員となり以て中央政界に其名聲を馳するに至り、常に黨勢

の擴張に銳意して嶄然斯界に重きを爲し、今や同地政友會の牛耳を執るに至りし人、家は縣下有數の資産家にある。

小 田 利 吉 氏

氏は福井縣坂井郡芦原村人、同郡鶉村に生る、幼より學を好み郷里の小學校を終るに及び福井中學校に入學し、好成绩を以て同校を卒業するに至り、郷に歸りて後ち同郷の小學校教員となり、更に同郡芦原小學校訓導に任せられ教養大に努むる所あり、校内外の信望漸く厚くして直ちに儕輩を抜いて上位に簡拔されて令名あり、氏は教育界のみならず、政治界に多くの趣味を宿し得て政界に善く通す後年家上の都合により其職を退き閑居せしところなりしか、信望厚き所の氏は直ち

に同村々會議員に推選さるゝ所となり、大に公共に致すの志を強くし努力一方ならず、更に區會議員、消防小頭に順次推舉さるゝところとなりて万全の努力を郷黨に捧げて功得あり、更に芦原温泉宿屋組合取締役に推され大に舊套を一掃し振はざりし芦原温泉に一大革新を加へ、之が振興に夙夜焦心し大に得る所あり、以て神の如く崇敬され人氣一身に集注されし所となる、資性磊落にして放豪、然かも細心緻密、穩健にして情誼厚く、風格堂々たり、且つ豊富なる資財を保有せり、氏は宏壯なる邸宅を構へ温泉旅館を以て營業とし、今や旺んに人氣を招來して居る芦原温泉一流旅館である、尙屋號を室吉といふ。

柳原九兵衛氏

代議士柳原九兵衛氏は、福井縣吉田郡の人なり、夙に努力を公共事業に竭し、家は代々農を以て業たりしも、氏は政治に意を寄すること厚く、公共の爲めには郷黨に日時を費して恪まざるの風格あり、故に人氣を集むること水の順に流るが如き状呈あり、天資温厚篤實にして且つ隔意なく無邪氣にして人に快感を得せしむる所に氏の氏たる所以あり、郷に在りての公職は、村會議員、郡會議員、を經由して福井縣會議員たりしこと前後二回に及びて、後ち引續き衆議院議員に選舉せられしこと亦二回にして現に代議士の位地に在りて大に國事に狂奔せり、其他各社會社の重役となりて國事の余日同社の進展に銳意大に努むる所あり、故に信望日に増し加ふるに至るも、之れ偏に氏の奮闘努力の賜ものならん、籍を政友會に屬して大に黨勢の擴張に銳意して怠らざるより同僚の信望又従つて厚き所となり更に氏の發展を祈りてやまざるものなり。

吉田間右衛門氏

氏は福井縣坂井郡芦原村の人、夙に力を公共に致して令名あり、天資温厚篤實にして且つ徳望高き人なり、従つて郷黨に信望又厚く、氏の營業は温泉旅館業にして常に親切丁寧を旨として嘖々たる聲名あり、氏の家又財寶豊かに數万の富を有するに至る、之れ氏が奮闘努力拮据事業に經營の賜たるものならん、昨年宏壯なる旅邸を新築し遠來の客に備ふる所あり、以て旺んに人氣を招來してゐる芦原温泉中の一流旅館である、屋號をつるやと稱してゐる、氏は現に芦原區會議員の職にありて區内の爲め大に盡瘁し、更に芦原温泉の總代として公私共に之れが代表となりて努力する所亦淺からずして大に信望を博してゐる。

廣部徳壽氏

福井縣會議員廣部徳壽氏は、福井縣坂井郡木部村の人、此地切つての豪農である家は舊家にして夙に郷黨間に重き聲望を有し、氏又幼より學を好み且つ漢學の造詣頗る深く、常に意を公共に寄せて敢て私利を顧みず、人格圓滿にして勤直なり且つ人と接して城壁を設けず、温容として坐ろに畏服せしむるに足るものがある名聲の嘖々たるものもあるも亦其所なきに非すと云ふべきである、曾て村會議員、郡會議員に擧げられ、福井縣會議員に選舉せられしこと前後數回に及び、其間縣副議長の椅子にありしこと一回、其他教育事業及用水問題等に於て多大の犠牲を提供したる跡歴然たり、現に今縣會議員の高職に在りて郷黨に致さるゝ貢獻亦淺からずと云ふ、籍を政友會に措き以て常に黨勢の進展に銳意せり、今や福井縣政友會支部に於ける黨中の中堅として重きを僚間になされつゝありと、敢て氏の健

康を祝福す。

淺野彌一郎氏

新聞記者淺野彌一郎の契天氏は福井市佐佳枝下町の人、明治十五年富山縣高岡市に生る、夙に政治に志あり、其の中等の學を卒へるや直ちに操觚界に投し氏獨特の持論の鼓吹に努め、今や福井操觚界に在りて特異の色彩を帶へるに至りし者、資性温雅磊落にして不羈獨特の風格あり、氏の操觚界に入りしは、明治三十六年埼玉縣埼玉新報社に入りしは抑もの始めにて、當時の氏には幾多の苦痛を感じ、轉して金澤市北陸毎日新聞の前身北陸新聞に社會部主任を擔し、後ち高岡市の高岡新報社、富山市の富山中央新聞を歴任して再び金澤市に至りて、石川新聞の創刊

に努力其効を奏し、再び富山市に到りて北陸タイムズ新聞社に入り、更に辭して笈を東都に飛ばし、知己を求めて氏迎合の萬歳新聞に其の得意の言を弄せしこと年餘にして退き福井市に至る、福井實業新聞社及び其の相續たる福井日日新聞を経て新愛知新聞社に轉し、更に福井支局長として福井に居構するに至つたのである、斯くして氏の新聞記者として各地に放浪せしこと多年、曾て秋風落莫の觀ありし福井日報を起し編輯を擔して之れを隆盛ならしめしも、亦氏の經緯に絶倫なる所に因らずんばあらざるものがある、明治三十七、八年の日露戦役に新聞記者としての氏は滿洲の天地に遊び大に其知見を廣むる所あり、尙其他に於て月刊富山の北陸佛敎新聞、伏木毎夕新聞、旬刊にては同北日本新聞、週刊の富山縣氷見町の北陸朝日新聞等にして、其他數へ來へば枚擧に遑あらざる程の遍歴の跡あり其の多くは社會主任を擔當せしものにて、主筆として關係せしは二三新聞社に過ぎずと云ふ、而して此の間關係せし新聞の多くは政友會系なりと云ふも妙とす、

氏の半生の経路記し来れば万丈の波瀾と陸離たる光彩に富むもの多かりしを想起せしむ、今や福井日報主筆兼新愛知新聞福井支局長として、此地に一頭角を顯はし、大に縦横畫策する所ありて、其温健なる筆は、隱然同人の間に重きを爲せり氏は獨り新聞記者として優逸の手腕を有するのみならず事務的才幹の凡を抜くべきものあり、以て嘖々の名聲を博しつゝあり。

安本安治氏

氏は福井縣足羽郡東郷村の人、家は名望ある一郷の豪家にして酒造を以て業となせり、氏は夙に力を公共に致し、一郷の盛衰に焦慮厚き人なり、天資慧敏にして善く事理を辯す其修學する所亦深く、以て人の畏敬する所なり、現に東郷村消

防組頭及び村名譽職の位置にありて大に斯界の爲めに夙夜努力淺からずと云ふ、尙業務上に於ては福井縣足羽郡、吉田郡の酒造組合の副組頭の要位に在りて大に同組合將來の爲めに畫策する所亦多しと云ふ、氏の名聲嘖々として郷黨に傳はり今や信望の中樞たるものと云ふ。

齋藤顯氏

齋藤顯氏は福井縣大野郡大野町の人、安政二年同郷に生れし大野藩士にして夙に大志あり、幼より學を好み造詣する所頗る深かく、氏は又地方實業界の重鎮たると同時に亦地方政界の一明星なり、壯より大野町會議員たりしこと前後十數年の長期に達し此の間十年一日の如く町治上の全体に於て苦節難解幾多の辛酸を嘗め

町勢の發展に貢献せしこと頗る甚大なりと云ふ、明治三十七、八年の日露戦役の當時は大野郡會議員の榮職に在りて郡政界に致せし功勞亦空しからずして氏の聲望日に増し隆盛するに至りしなり、氏の家は氏を以て開祖とし絹織物を爲すを以て營業し資産又豊巨の聞へあり、現に大野大七銀行の取締役として同行に干與しあるのみならず海上生命保險會社の代理店を兼するに至りて對忙精勵既に壯者を凌ぎ居れり、天資硬直沈毅にして氣骨銷磨し難き所あり、又一流の氣骨者とし郷黨に重きを置かるゝに至るも故ありと謂へし、敢て氏の健康を祈る。

松浦良次郎氏

工學士松浦良次郎氏は福井縣大野郡大野町に生れ現に京都電燈福井支社長の任に

在る士なり、氏の生家は名譽ある大野藩士にして夙に令聞あり、幼より學を好み造詣する所頗る深かく、大野私立中學校に入りしが普通學究初等の階段にして更に轉じて東京市日本中學校に學び、卒するや第一高等學校に入り、順次經學して明治三十九年東京帝國大學工科大学を披群の成績を以て其業を卒つるに至りしものなり、氏は直ちに一年志願兵として入營し明治三十七、八年の日露戦役には海外に派して大に戦功あり旅順陥落に際しては電氣機械取毀ちに從事して貢献亦淺からずして更に亦知見を廣むる所ありと云ふ、歸朝直ちに氏の驍名を知りたる京都電燈會社の聘する所となりて入社し、更に福井支社の設置する所に會し技師として福井に來任し當時の支社長高橋氏を補佐して遺憾なきを期せられ、高橋氏病没後、氏其跡を襲ふて其椅子に倚るの經路を有するものなり、天資樸朴温雅にして長者の風あり、悠容として迫らざる態度と崇高なる人格は、比叡の山の如し、人をして自から敬慕せしむるものあり、而して氏の邸は福井市月見町赤阪山上に

在り。

早見光太郎氏

氏は福井縣會議員たる氏は思想界の人として郷黨に唄はる、氏の抱負として人に語る處に曰く政治は政治屋の專有の様に心得て居るが、政治は人民の政治で敢て階級的差別のものではない、故に社會人生の根本問題を究極せんとするには先づ思想の自由と普通選舉である、又政治家としては何時にても内閣と反對の地位に立つのが當然であると思ふ云々、之れを以て見ても氏の抱負と意氣を知るに足る氏は福井縣吉田郡森田村に生れし人、夙に志を抱き和漢の學を修學する所頗る深かし、長じて政治に志し氏の家は一郷に名望ある舊家にして資財亦豊なり、絹

織物を以て業とせり、氏は公共に盡すの念行厚くして部民崇高の一人者たり、曾て村會議員、郡會議員に推舉せられしこと前後數回にして貢獻せしこと亦淺からずして福井縣會議員改選に際して郡有志の推すところとなつて當選し現に其位置に在り、以て氏獨特の議論を議政壇上に獅子吼なすに至るは氏又辯論の人たるを失はざるなり、同時に福井縣絹織物同業組合副組長の要位にありて同業の進展に努力怠らざりしと云ふ、資性硬直不羈併も人と語つて些の障府を設けず先天的に人をして推服せしむるの徳を持つてゐる、嗜好としては讀書、煎茶、書畫、骨董俳句等が重なるものであると云ふ。

黒川與志雄氏

氏は福井縣吉田郡圓山東村の人、家は噴々たる名望ある資産豊なる舊家なり、資性温厚篤實にして併も偏狭の人にあらず、家業の傍ら出て同村収入役となり努力大に致す所ありて村會に信望を得、改めて同村助役に推舉され十年一日の如く村治上に爲せし貢献亦一方ならずといふ、以て聲望の更に厚きを加ふ、此の間實に十年の永きに及びしとは氏の如何に堅忍努力の不拔の精神は以て非凡と云ふの外なしである、方今實業界にも驥足を伸ばし、信用厚き九十一銀行を初め越前木材株式會社、越前石材株式會社、大福株式會社より其他關係せし會社數個にして止まらず銳意斯界に精勵怠らずして初志を離へせず最近に至り九十一銀行に在りて其の細心緻密なる手腕を發揮し居れりとは同行の爲め又祝すべき一點である敢て氏の將來を祈る。

藤田篤氏

氏は機業家なり、福井縣坂井郡春江村に生れし人、家は世々農を以て業とし傳はれ來りしものなるが氏は祖業の傳襲を意とせず夙に絹絲界に心を寄せ遂に絹織物業を開始するに至る、幾年ならずして斯業界に中位を占むるに至りしものなり、之れ氏の時運の推移を観るに敏なる多きに依らしむるものありとす、氏又俠骨銷磨し得ざる所あり去年衆議院議員の選舉に際し某人の貧にして爲すなきを知り勞資の供を吝まざりしといふ一事を以て見ても氏の能く義俠に富むの人と成りを知るに足る、氏又政治上思想を有す敢て氏の更進を望みて止まざりき。

小林三郎氏

氏は福井縣坂井郡高椋村舟寄の産、家は累代農を以て業となす名望ある舊家にし
て一郡富豪の中心たり今未だ年若くして公事に携はることすくなきも其の郡郷に
致せしは淺少にあらざりしといふ、氏は志操堅實にして温容又人を入るゝ雅量に
富む、其の福井中學校を卒業するや負笈して東都に遊學し後年故山に歸り書齋に
修學する亦久し、氏は非常なる讀書家にして大抵の新刊に目透せざりしものなし
といふも室内渦つ高く堆積しある各種の書籍を見るに及びても斯くあるべきもの
なりと信を置くに充分なり、此の人今や同村青年會長として青年指導の任にあり
て能く盡せりといふ前途洋々としてたのもしからずや。

近藤與作氏

氏は酒造家なり福井縣吉田郡上志比村牧福島の人、幼より學を好み修學する所深
かし氏の家は舊家にして資財豊かなる名望家なり、氏は祖志を繼ぎて酒造を以て
業とす、久しく業務の擴張を大阪京都東京の三都より各地に於て爲し以て有名な
り、氏は又學務委員より同村村會議員等各數次に及びて當選する所となり曾ては
福井市及び吉田、足羽二郡の酒造組合の理事又同株式會社の監査役たりしことあ
りと云ふ、且郡會議員に推舉されしこと一回後ち福井縣會議員の選舉に際し有志
の推舉するところとなりしも家上の都合氏をして辭退の餘儀なきに至らしめて其
地位を得ざりしといふ村治上に功勞ある囑望多大の氏なり、而して言動活潑にし
て氣概あり且慈愛に富むの氏か事情はともあれ縣政界の位地に就かざりしを過ぎ
し昔のことなるが氏の爲めに惜みて止まざるものなり。

林 末 治 氏

氏は福井市の人、安政四年二月を以て福井縣坂井郡本郷村八幡に生れし人、夙に
大志あり、家は世々農を以て興りしも氏は鋤鋤を執るを意となさず修學する所頗
る深かきものあり、氏の家亦郷黨に信望さるゝ多く、明治九年地租改正に際して
は地租課御用掛の被命ありしをそも公共に致すの第一歩として、市町村制施行當
時には亦其の委員となりて努力大に深かく、明治十二年に福井市照手上町林氏の
養子となり、更に市政上に於て陰に貢献亦淺からずして信望漸く聚り、佐久
良中町外十七ヶ町聯合組會議員となり、越へて明治二十一年市制發布に際し第一
着に市會議員の重職を擔ひ、更に市參事會員に拔擢せられ、大に市政の隆興に身
躋して世間の信用更に厚きを加へ、大正六年に至るまで市會議員に在りしこと二
十六年餘にして此の間市參事會員にありしこと前後四回追ひし功勳者なり、政界

若 林 源 四 郎 氏

に於ては政友會に屬籍して大に黨勢の擴張に銳意怠らざりし人なり、氏又慈愛に
富み且つ敬虔の念深かくして、神社佛閣其他公共の事業又は個人に對し寄附せし
こと前後數千金に及びしと云ふに於ても如何に其の人格の崇高なるを知るに足る
ものあり、其の他福井大火後に於ける福井郵便局建設敷地問題、福井勸工場の設
立等につき幾多の辛苦を嘗め市民意合の結果を齎らすに至りし偉大の功勞者たり
、此の人今や劇場世界館の持主として多額の收穫ありて極樂隱者を極め餘生を全
ふしつゝありといふ、敢て氏の健在を祈る。

氏は福井市日の出下町の人、明治十三年富山縣に生る、家は郷里に於て累名あり幼にして志を抱き當時の北國に居るを好まず、明治二三十年笈を負ふて京都に出て、某塾に普通學を専攻し、後ち京都電氣鐵道株式會社の創立さるゝや直ちに會社に入社し、電車の操縦に従事し當時の運輸課長富岡を氏助けて斯業に貢献せしこと甚大なり、氏又温容にして善く人に接す、天授の奇才に富むの氏は累進して同社重要な位地にありて外務の全般を擔して万全の効を奏し、同社の進展に致たされし効果の更に偉大なりしを示し、同社内外に信望を博し、大正三年三月越前電氣鐵道を開設さるに際し、福井支社の運輸主任に任せられ、全力を傾倒して社業に盡瘁し運輸課長の位地を占むるを得るに至りしもの、氏が京都電氣鐵道に入社の當時は電車の敷設は日本に於て名古屋と京都のみなりしといふ、此の電氣鐵道の神たる氏を迎ふるを得たる越前電氣鐵道會社の日に増し隆盛を見る亦宜なる哉である、更に氏の發展を望みて止まざるものなり。

森 健 太 郎 氏

氏は福井縣大野町の人、明治十六年八月同縣勝山町に生る、資性濶達にして俠骨銷磨し得ざる所あり、其の小學を出づるや卒然大阪に出て堂島中學校に入學し、普通學を修め更に學を中央に求め、明治大學に法律を學び、卒して尙東都に在ること數年なりしが意の如くならずして郷里に歸り祖家に在りて將來を案ずること數月、決然明治四十年五月福井縣巡查を拜命し精勤衆を抜き、明けて四十一年七月巡查部長に昇進し勤績中滋賀縣に普通文官試験のあるを知り、明治四十二年二月優位を以て同試験に登格し、同縣警察界に信望を博し、同年三月同縣警部に擢さるゝに至りし人、大正二年其の職を辭し、大野に閑居し大に將來を劃する所ありといふ、尙氏は明治三十七八年の日露の役の戦功者にして、且つ武術に鍛練せし人、歳未だ壯なれば將來氏に於て期待する所更に多きかを思はしむ。

熊谷五右衛門氏

氏は福井縣坂井郡坪江村の人、慶應元年六月を以て生る、家は代々農を以て業と爲す地方の舊家たり温厚徳實なる人、信望従つて厚く曾つて郡會議員、村長、縣會議員等を選ばること數次、副議長を経て、縣會議長に進み其間常に殖産興業に力を盡し、交通の發達河川の改修港灣の修築等を企畫し、公共事業に盡瘁せしこと多年、其功績頗る顯著なるものあり爲めに賞を受くること屢次にして聲望隆々たり、先きに政友會の元老杉田定一氏の上院に勅選せらるゝや氏は其の後を承けて選舉を争ひ、一舉直に當選の榮を得たりしを初めとし爾來其の選に漏るゝことなかりし氏は先年野村勘左衛門氏に譲りて其の選に當らざりしといふ互讓美德の人格者なり。

佐々倉彌之吉氏

氏は福井縣吉田郡殿下志比村轟の人、明治六年六月を以て生る、家は代々農を以て興り同村桑原貞治氏の舍弟にして明治三十一年三月福井市不動町佐々倉氏へ入夫せし人、後年東都に出て牧畜に業すること數年此の間幾多の辛苦を嘗め、經營其の宜しきを得て今日の大盛を爲すに至りしといふ、資財豊富にして且つ慈惠に富む、信望従つて蒐り風格堂々として衆を抜ぐ温容の人なり、妻女いな子の君の内助の又氏に致せし多きかを思はしむるものあり、長男雄次氏又新智識を揮ひ大に全務に鞅掌しつゝあるに於て氏に又發展の餘裕を得て、更に爲すところの甚大なるものあるを期待して疑なしとす。

荒井關造氏

辯護士荒井關造氏は福井縣足羽郡麻生津村花守の人、明治二十一年八月同郷に生る、幼にして聰明、英氣あり且つ學を好み、夙に望を前途に囑せらる、長して普通教育を了るや、大正四年奈良縣に普通文官試験あるを知りて走りて一躍群を抜いて之に登格するを得たり、直ちに官界に志して福井縣警察に入り、大正六年三月警部補に任せられて敦賀警察署に勤務し精勤僅かにして同年九月警部に累進し福井警察署に轉し司法主任として司法事務を擔任するに至りしものなり。此間僅かに六ヶ月なり斯くの如き日少にして昇進せしこと福井縣警察界に於ては氏を以て之れが嚆矢であると云ふ、此の一事正に氏の今日ある所以を語るものであると云はねばならぬ、此の警察界の寵兒たる氏は大正八年八月驟然辭して笈を負ふて東京に至り中央大學に法律學を専攻して大に知見を廣むる所あり、大正十一年三

月辯護士試験に出て一蹶之に及第し此年四月業を福井市佐佳枝上町元山川公證役場跡に開くに至りしものなり、此の試験に合格せしは氏が未だ在學中にありしといふ、如何に氏が頭腦の明晰にして勤學に敦厚なりしかを周知せしむ、今や氏が非凡の手腕識才忽ち世上の認識する所となり、名聲噴々として一時に揚るに至る資性磊落にして人に阻隔なき正直勤勉の人、辯護士界に投じて以來日尙淺しと雖も大に信望を流しつゝあり、年未だ壯ならば、前途必ず見るべきものあるや多からむとは識者間に於ける現時の定評である。

乗木弄世氏

氏は福井縣足羽郡下文珠村太田の人、家は一郷の舊家にして農を以て業となせり

豊富なる資財と系統的家柄は此の家の名聲を爲すに至りしものなり、氏又祖志を承けて家に在りて公共に志しを寄すること厚く、福井中學校を卒業するや一年志願兵として入營し漸次少尉より中尉に累進精勵群を抜き燦然として僚星の間に重きをなされて今日に至りしものなり、人と爲り磊落にして放膽、然かも細心、緻密、機敏にして粗略ならず、且つ情誼厚き學殖深かき人なり、氏は最近株式會社九十一銀行に入りて大に營業的活躍を試みつゝありとは實業界方面にも又趣味を有されて居るものであると、年齒尙壯なれば、氏の社會的色彩は之れからであると期待さる。

尾崎彌右衛門氏

氏は福井縣大野郡大野町の人、當年正に三十二歳、氏の家は一郷に振へる屈指の資産家にして夙に名望あり、氏祖時代は酒造を以て業とし且又斯業の餘面谷鑛山精練事業を起し經營大に其功を收め來りしが、氏は心を公共に寄すること厚く或は農事の改良、町政の革新、教育の振興等其他公益上に盡瘁一方ならず、幼にして慧敏頗る學を好み、福井中學校を卒業するや笈を負ふて東京に出て早稻田大學に入り法政經濟の學を専攻し苦節數年にして同校を卒して郷に歸るや三等主計として伏見聯隊に勤續せしことあり、今や郷黨に於て識者の一人として高唱さるゝに至り衆望厚くして遂に大野町會議員に推舉され更に大野町消防組頭に任舉さるゝに至りて一段の努力を斯界に致し、名聲の更に深かきを加ふるのみ、之れ氏が單に公共的觀念に富み、熱誠事に終始するが爲めばかりでなく全く其の高潔なる性格が人をして畏敬せしむるに到つたものであると云はねばならぬ、クラ子夫人は布川町長の令娘にして常に淑徳高き聞へあり、氏の年齒尙壯、前途必ずや見る

長谷川 正 氏

氏は福井縣足羽郡木田村木田地方の産、家は農及び石材事業を以て名ありて其地方に於ける大地主として郷民間に一大勢力を有するに至り、天資磊落瀟洒にして又英氣峻快たり曾ては金澤騎兵隊に入り日露戦役に參加して大に戦功あり後ち同村々會議員、學務員たりしことあり此の間公共に盡瘁せしこと多大なり氏又越前石材株式會社の重役にして同時に又福井布糊株式會社の重鎮として兩社の爲め經營頗る努むる所あり従つて益利する尤大なり依て株主間に聲名噴々たり現に足羽郡々會議員にして又郡參事會員たる榮職を兼ねるに至る、氏又同郡政界の一寵兒

たり同志の交り極めて厚くして又一般的慈愛に富む、氏夙に志を政治に潜めて斯界に忠なる所甚大と言ふに於て更に氏の一大飛躍を見るに至る亦遠きにあらざるなきを期して待つに足る、衆又斯くあるを疑信せず。

齋藤 初五郎 氏

氏は福井縣坂井郡磯部村中筋に生る、資性温直忠實にして人と交り厚く親切なり、家は村内屈指の農耕たりしか後年絹織物業を兼行せり資財豊にして村内富者の一人たり、氏又其の家を相續するに及びて善く父の志を繼ぎ敢て怠らざるを以ての令聞あり、遂に推されて同村収入役となるや細心最も其職に忠切たり其後村會議員となり、更に坂井郡々會議員を経て大正十年九月同村々長となる、其他學

務委員用水組合委員等一村一郡の公役を一身に蒐め得るに至りたる、是れ一に氏の平素沈黙寡言實行を専らにし眞に敬服に價するものあるに因る、又氏には長男源良氏ありて家業を援くるの風狀他の眞似る能はざる所あり之れ氏の教養の然らしむるとは言へ源良氏の資性温順以て茲に至るの慮ならざるを信せしむる所あり、源良氏は大正十年岩崎恒吉氏の跡を襲ひ消防組頭となる、之れ偏に氏か公私人として信望ある所以ならむも父子揃つて公使に盡瘁す是れ一家の重珍として寶記するの要あらむ歟

岩 崎 恒 吉 氏

氏は福井縣坂井郡磯部村庄蓮花の産人資性正直にして言んと欲する所を言ひ行はんと欲する所を行ふ氏又慈愛に富む資産豊かにして此の方面の富者なり能く力を

公共に致し人の敬愛する所となる、家は農なりしも中年感ずる所あり絹織物業を起したるか斯界に無經驗なる氏は此の間幾多の苦節を嘗め辛苦經營今日の大成を見るに至れり其の間村會議員消防組頭用水組合委員等に數次選はるゝ所となり村治上に貢献したる枚舉にに遑あらず氏は昨年病症治療の故を以て一切の公職を辭し又機業は令息に委し現今清養に在りと云ふ氏は今未だ五十に達せざること何歳あり快復更に爲す所あらんを衆望されて居る氏の健康を祈りて止まざるなり

竹 村 等 氏

福井市會議員竹村等氏は同市大和上町の人明治二十年九月同郷に生る、氏の家亦一郷に唄はる舊家にして資財豊富の聞あり、幼より學を好み明治四十年福井中學

校を卒業するや郷を辭して東都に專學せんとせしも氏の家情之を許さず、郷に在りて更に獨學自修造詣する所頗る厚く、常に志を大局に注ぎて公共に專念し、爲すこと凡て奉公的ならざるなしと云ふ、氏は大正九年七月國勢調査員に任せられ大に努むる所あり、氏又實業界の人たると共に幾多政界の人たるを失はざるの色彩を有す、曾ては福井立憲青年黨に贊助して黨員となり大に時弊を痛論せしことあり、大正十年四月福井市會議員の改選に際し立憲青年黨より推されて競争の波を一蹶當選の榮を担ふに至りて更に公共に致すの念を増厚し、彼の市民沸湯の問題たりし高等工藝學校敷地問題に當り市會議員を三分して其の一を以て研究會の組織に奔走して之れを完成せしめむるに至り、當市圓滿の發展を期し爲めに夙夜苦慮の餘單身東京に到り大に畫策する所あり、遂に西部牧福島に設計の議了を爲すに運びて此の問題の解決を告げたりといふ、いかに氏の抱負の遠大にして慧敏なるは方に一群を抜いてゐる、天資重厚謹直にして親み易く冒し難い所あり、亦

人に接して圭角なく温情の流露たるものあり、仁俠にして義に富み公共事業に卒先盡瘁し、飽くまで奉仕的觀念に富んでゐる、蓋し氏が克く今日あるに到つた所以である、今や郷黨の囑望厚くして大に名聲を博してゐる。

伊 藤 孝 氏

法學士辯護士の伊藤孝氏は福井縣吉田郡圓山西村町屋の人、氏の家又一郷の名望家である、幼にして穎悟頗る學を好み、福井中學校を卒業するや鹿兒島高等學校に入り業を卒へて東京に負笈し帝國大學に法律を專攻し幾年螢雪の功を積んで卒業するや、辯護士となり事實の研鑽を大阪の辯護士柿崎氏の下に凝らし、更に東京に走りて斯界の濫輿を極め切磋の利多くして郷に歸りて開業し以て今日に到り

し人、爾來熱誠以て訴訟事務に従ひ斯界に名聲を馳するに至りて更に一般の信望を博してゐる、人と爲り聰明にして機略縦横不撓の氣骨は愈々冴へて凌々たるものあり、事務所を福井市佐佳枝上町福井地方裁判所附近に新設なすに至れり。

大村與三吉氏

氏は福井市日の出下町の人、福井縣足羽郡六條村大町の出身にして家は代々農を以て業とし來りし、相當地方に聞へし舊家たりしが、氏は明治二十九年驟然出て居を舊名新屋敷なる今の所に移したのである、天資硬直にして且つ仁俠に富む所あり、又寡慾恬淡にして且つ自然を愛する所より遂に庭園植木の栽培を弄するに至りしものなり、氏は夙に公共に盡すの念頗る厚く、明治三十五年頃町内の道路

迂回し交通不便なるを憂ひ、元新屋敷西一番町より直接福井停車場方面に向つて道路の新設計を企畫し拮据經營十年にして漸く宿志の徹する所となりて大正元年十二月新屋敷町組合員一同より銀杯の贈呈を以て感謝の辭を寄せられしことあり之れ偏に町内有志の後援せし所ありしとするも氏の努力の甚大なるは蓋し淺渺にあらざるなり、又是より先き宗像福井縣知事より道路延長寄附の廉を以て木杯の褒賞を受けしことあり、大正五年三月福井市長山品氏より町内の弊習矯正且つ税法遵奉宣傳の功を表彰され、越へて大正十年六月福井師範學校長野清學氏より同校記念石設置に付き約四千貫餘大石を福井縣足羽郡酒生村字宿布藉より幾多の危険と故障等を冒し以て之を搬出し設置の作業を完成するに至りし功勞を表彰され更に大正十一年一月十五日付を以て福井市新屋敷組合員一統より前後三十有四年間同町組合役員として町治に致されし盡効の大なる所あり、以て七八戸の小數の町内が今や約二百有餘軒の大區域に至りし大發展は之れ一に時勢の然からしめし

所に據ると云へ之も氏の努力の齎らせし効果の賜なることを多とし、氏は今回區長の重責を負ふと共に繁劇堪へ難き所より退役に際し組合員一統惜哉の極其の効績を稿ふ爲め銀瓶一個を以て感謝の意を寄せられたりといふ、誠に人情紙の如く薄き今時に奉公の念厚き氏の如きは奇特中の奇特といふべき偉なる人であるとして信望更に一段の色彩を添へ方さに聲名噴々と鳴りつゝあるも亦宜なるかな、今六十一なりと云ふも健康壯者を凌ぐ、敢て氏の將來を祝福するものなり。

生田卯兵衛氏

東京日本橋中井銀行調査部長たる氏は福井縣坂井郡春江村西太郎丸に生れ、其の姓を高山と呼びし人、家は代々農を以て業とし來りし舊家なるが、氏は鋤鋤を執

るを好まず、幼より學を好み、郷にありて獨學自修せしこと深く、中にも數學の道に秀で若くして村立小學校の教職に任し、兒童の教養に致せしこと數年、こゝに迫りて郷間に敬意の萌芽を生み出せし有爲の當時の青年たり、氏は飄然として待期するところあり、明治二十二年負笈して東都に出て、勤學勉勵の末實業界に驥足を伸し苦節七年後ち東京の人生田氏の養子となり、其の姓を冒す、越へて明治三十年頃同志と相謀り東京通商銀行を創立し其取締役となり、同行將來のため大に貢献するところありて信望を博し、氏は東京銀行界の驍將中井新右衛門氏を知る所となり、中井銀行に聘され累進して調査部長の重役を、一身に擔ひ研鑽厚くして銀行内外の信用亦従つて多きを加ふる所となり、氏はまた沈毅にして正直徳行用意周到の人、財寶亦豊かなり、氏は今や同行に石柱視せらるゝのみならず東京銀行界に重視されるに至る、亦宜なるかなである。

中川清太郎氏

氏は越前吉田郡森田村の人、同郡中藤島村に生れし人なり、幼にして倜儻不羈氣骨稜々として群童を抜く其郷に在るや深く和漢の學を修め、後ち負笈して東郡に出で獨逸語等を修め東京臍生學舎に入學し、明治二十八年拔群の成績を以て同校を卒業し、同年九月醫師檢定試験に及第するや東京市中なる某病院に醫術實地の研鑽を凝らせしこと數年に及び、明治三十三年郷に歸りて同所に開業をなすに至りしものなり、氏は亦尋常の刀圭兒にあらず夙に國事を憂ひて自由民權を唱導し縦横政界に馳驅する所あり、明治三十七八年の日露戰役に陸軍三等軍醫として従軍せし功に依り二等軍醫として從七位勳六等に叙せられたり、氏天資穎敏勞する所少なくして實蹟を擧ぐるに妙を得、氏亦其辨を壇上に揮ふや辨論風發滔々として舌端虹霓を吐くの慨あり殆んど底止するを知らざる所あるは正に對者を屏息せ

しめずんば已まざるの豪氣あり、氏亦辨論の人たるを失はざるを証して剩りあり明治四十三年の福井縣會議員の改選に際し、自稱候補を以て其の選に起ち時の大將株たる大橋松二郎氏及び柳原現代議士を向に廻はして奮戰大に努むる所あり、其功空しからず遂に此の猛者を激退して當選の榮を擔ひ、氏は更に其の後の改選にも當選して縣議政の人たりしこと引續き二回に迫ひたる當年の快活兒か、一昨年の改選には立候を辭して早見氏に譲りてしかも之れが應援に力を致すといふ、氏には謙讓美德の性神をも宿し得ていかにも當今時代に珍らしい人であると衆望を流し込み居れり、氏亦政治界にのみ狂奔する單純家にあらず實業方面にも大に曠足を伸ばし、現に大福織物株式會社々長として大に其の發展に努力怠らざるのみならず、各種會社の専務其他重役として介在しあるといふ、献身的なる氏は職務に熱心にして治療患者に對する別人の如く丁寧親切殊に厚し、しかも寡慾恬淡にして物質的思想毫も存在せず、且つ人に城壁を設けざれば人をして光風霽月

の感あらしむ、氏亦健在せよ氏の政治的生命は寧ろ今日以後に在り今後の活躍期して待つべきとなさん、又令息諭君は醫學博士の稱號を享け今や海外の途にあるも次年歸郷して氏の後を繼ぎ大に活躍する所ありと又令息諭君の夫人は福井縣坂井郡三國の富豪横山氏の息女にして淑徳夙に高く謙讓の態を以て始終されてゐるされば氏には更に豫融の途を開くに於て氏も亦以てながく池中の龍たるものにあらざるべきなり。

河合甚三郎氏

縣會議員河合甚三郎氏は福井縣吉田郡東藤嶋の人である、福井縣政友界の人氣物其才氣手腕は儘に縣政界の環視の中心である、家は農を以て業と爲す名望ある舊

家なり、氏は幼より修學する所深く夙に政治に志を寄せ其長するに及び漸く政界に驥足を伸ばすに至りて名聲を揚げ今日に至りしものなり、常に公共に致たすこと甚大にして一郷の信望を一身に擔ひ或は村會議員に、或は郡會議員に、或は村助役に、或は村長に各推舉されしこと數次にして功勞あり、其の縣會議員たりしこと二回其間縣參事會員の職に在り、縣政界の爲めに盡して大に功あり、又政友會の爲めに焦心大に努めりとは氏の將來に期する所更に大なるものあり。

島田兼松氏

氏は福井縣吉田郡森田村上森田の人、夙に絹織物界に入り今日に至りし人、天資温健直實たるの氏なり信用又斯界を通して此地方に噴々たり、爾來同村々會議員の

改選ある毎に擇選せらるること既に其第三回に及び、現に同村村會議員として且つ古參株を以て目され殆んど會議中の顧問役たるが如き觀を呈し居れりと言ふ又消防小頭及學務委員等の職にありて此の途に盡せしこと甚大なり、氏又文學の趣味多く且又政治に意を寄すること深遠なり此間村治公共事業に貢獻せしこと尠なからず、資財豊かにして實業界に驥足を伸ばし關係せし會社又少なからず現に東亞工業株式會社の常務取締役の要職にありて専ら事業の經營に盡瘁至らざるなしと云ふ、氏又慈愛に富むの士なり衆人の囑望又故ありとせん此の衆望あるの氏は應て地方政界に拔選せらるること疑なしといふ。

増山與三平氏

氏は福井縣足羽郡東郷村の産にして年また少く、天資温健にして寡言着實の人、而し又英氣果斷に富むの氏なり、幼にして學を好み修學する所又深遠なり、故に他方に多くの趣味を有す、居常時事の問題を論し、口に國家爲政の要道を説き、弊政の刷新を論痛し以て氏の余りに政治に興味深かきに衆をして感驚せしめたりと言ふ、氏の家は絹織物業にして且つ内地物の製産多く開業既に四十年余に及びりといふ福井縣下最も古き内地物産の祖始者たり、故ありて其の技巧の妙手たる製産品は本場の京都市業界を驚嘆せしむる逸品を産出せり、曾て福井縣知事より受けし一二等の賞狀木銀杯は前後十余回に及びたりと云ふにあり而して資財豊かにして仁俠に富む、氏は同村織物機業親和會長に、在郷軍人副會會長に推舉され、私業の傍ら此の公會に盡瘁せしこと自己の夫れに對する以上の如き貢獻あり信用の歸屬水の順に流るるが如くして次第に聚まり、此の衆望の氏は大正十年の村會議員の改選に地方有志の推す所となりて第一位に當選の榮を擔ふ衆望の厚き

こと實に此の如し、氏又事理に明かにして意志固く同志間に重きを置かるる、氏の發展を更に切望す

島田伊三次郎氏

島田伊三次郎氏は福井市松本の産、新町名同市老松中町の人である、氏の家は世々代々藥劑を以て業と爲し來つたのである家は素封家で累代名望の中心たり、氏又先代に背かず意を公共に誣き衆人の利害得失に固き觀念を抱き全体の爲めには私利を抛け打つ弊履を棄つる其れか如くに類す従つて衆人の信賴する又厚き所となる、氏の面目は恬淡寡慾にして物に拘泥しない所に躍如としてゐる曾て福井消防の改革さるるや消防小頭に拔選せられ爾來一日の如く公務に努力さるるは周知

の事實たり今尙其職に在り且市會議員改選毎に當選の榮を擔ふこと茲に二回を算するに至りたり、大正十年の改選後最初の市會に氏の仮議長としての風貌は其の後時代の議長を凌駕するの風格ありたりといふ、兎に角氏は福井市會中の人氣物であることは紀念すべき、點なりとす、敢て氏の健在を祈る。

田中治郎左衛門氏

氏は明治六年八月福井縣今立郡上池田村水海に生れし人、家は世々農及山林を業とすを以て地方に名ありしとの資財郷黨に於ての第一位を占むる富者也、天資磊落豪放にして事物に遲疑とす英氣に富むの風習あり郷里の尋常小學校より順次高等小學校を終へ更に中央に修學を試みしも家情之を許さず依て地方の漢學者に

就き漢籍を修むること深く數年余に及ぶ後年々村役場に書記となりしを公職に入りし最初として、明治四十四年八月上池田村消防の創立を發起し種々劃策至らざるなしの結果同村消防組の設立に際し同消防小頭となり、越へて同五年七月同消防組頭に任命され今尙現職の人となる氏は大正四年十二月御大禮に際し火災盜難豫防其他地方警備の任に當り大に其職に盡せし功績淺からざるに付き福井縣警察部長より感謝状を受けたるより大正五年十一月三十日消防組頭の職を全ふし従つて部下の消防組夫をして更に其職に忠ならしめたる廉の如何にも秩序整然として他の眞似る能はざる底の凡ならざる品位高率にして神聖なる努力を致したるにより同縣警察部長より精勤証を受くるを見るに於ても其の公共心に富めるを推知するに足るものあり、従つて衆望益々集まる所となり大正九年三月同村學務委員に同年六月同村部子山復興會副會長に同年七月同村農會評議員に當選したる、氏は更に大正十年二月廿四日同村村長に當選して現其職に在り、氏又慈悲に頗る付き

富むの人、社會公共は言に及ばず個人としても其窮を見るに於ては一掬を注がすには居られぬと云ふ情熱ある人、時に或は學校役場等の消耗品の全部を寄附せしこと一再に止まらざりしといふ依て村治の將來に大に囑望されつつありと云へば郡會縣會を経て更に中央議政の人となり得ること疑信なし、殊に敬神の念深く部子山の復興に關して幹事多賀氏等と協力非常に努むる所あり、人心輕薄浮佻の今日國家社會の爲め大に慶すべく敢て氏の將來を祈る。

青 木 豊 氏

青木豊氏は足羽郡東郷村脇三ヶの産、青木春平氏の長子なり家は此の地方に於ける豪農にして且つ家傳の蘭麝酒の營業を以て令名あり、氏未だ春平氏に隸屬して

家計に携はらず傍ら父君援助の立場にありて家事に奔走す、氏は福井中學校卒業するや東都に負笈して早稻田大學に政治、經濟の學を修蓄し業を卒へるに及びて今に至りし人、悠容迫まらざるの風貌は更に人を容るるの雅量を示す、氏は其の蓄積したる學識と崇骸なる人格とを以て此の地より地方政界に陣し本縣政界の一異彩者たることを囑望されつゝありといふ。

酒井善松氏

氏は吉田郡中藤島村の産、福井市松本の人資性温良にして正直且つ篤志家の人として令名あり、學識深かきと言ふにあらざるも能く事理を解釋するに敏捷なり、又公共心に富むの人なり、依て衆人の敬する所となる先きに福井第三部の取

締として消防組に任信され現に其職分たり、又松本上町青年會長に推舉され同會の爲めに盡瘁せしこと枚舉に遑まあらざるなり、氏は又政治に多くの趣味を持せり市政の刷新に大に努力せしことあり、氏の家は自轉車販賣を業とせり氏は又陸軍出身にして彼の慘激なりし日露戰役の功に依り勳功ある功績の士なり、氏の發起を切に望むものなり。

今村作榮氏

氏は福井縣足羽郡東郷村の産、家は呉服商を以て業となせり資財豊富にして地方の信用厚き人且つ公共心に富む、曾て同村の區長を努むる數年此間公共に盡せしこと一再にして止まらずして衆望益々厚きを加ふ。更に大正十年九月同村村會議

員の改選に際し同地有志の推舉する所となり立候して其の選に當る現同村々會議員たり、氏又政治に幾多の意見を有するも今未だ黨派に關係する所なくた意志のある所に主義せんとするの概あり、風貌剛健らしからんも質朴なる方多からんは氏の行動に於て窺ひ得られんとす。

松村新藏氏

氏は陸軍出身の人、福井縣足羽郡東郷村昆沙門の産家は世々農耕を以て業務とせる温厚の家系たり、家又相當の資財ありて地方の信用厚き所なり、曩きに當地の小學校を卒するや出て中途學界に修學せんとせしも家長の故たる事情の纏綿して其の出づるを許さず餘義なく居常獨學修蓄する所ありて氏の今日を致す、氏又鋤

鋤を以て處世するを好しとせず、曾て第九師團金澤野戰砲兵に入營するや累進して軍曹の位置を得しかば身を軍籍に終始せんと志させしも之れ又前同様の事情にて期年の明くるが儘々に家に在りて今日の内地絹織物を開業するに至りしと云ふ、爾來斯業の發展に忘食、之れ努力といふに於て今の盛業を見るに至りしものなりとはさもあるべきことである、當地方に於ける斯業の位置は増山氏の第次に順すといふ、氏は又風貌魁偉にして天資豁達なり、更に日露戰役に砲彈雨飛の間に偉勳を奏せし氏か今や同村在郷軍人分會長の位置にありて同會は勿論當地公共の爲めに私利を抛け打ち活躍大に努むる所ありとは一轉更に邦家の爲めの慶事の大きなものなりとせん、氏の發奮を祈りて止まず。

白崎敬三氏

氏は福井縣南條郡の産、同縣坂井郡三國町の人、家は酒造を以て業と爲せり、又同地方に於ける一富豪たり、氏又家業の傍ら公共の事に盡瘁すること頗る厚く曾て町會議員たり、郡會議員たりしこと各二回にして自治に貢献せる所尠なからず、氏は又福井中學校を卒業するや一年志願兵として入營し累進して陸軍中尉に叙せられ、更に日露戦役に依り功五級を賜はりたる軍界偉勳の功績者たり、資性磊落にして善く人を容るるの雅量ありて、以て人の敬慕する所となる、大正八年福井縣會議員の改選さるるに會し郡に公認にざれ立候して其の選に入る、現に福井縣會議員として名聲噴々たり、將に郡政界に於ける中老株として目視さる籍を政友會置くに。

水 島 力 氏

福井日報社重役水島力氏は福井縣坂井郡大石村江向の出身にして福井市老松中町の人である、恒に公共に寄與すること深く、其の郡に在りての氏は非常なる勸業の熱心家を以て聲名の噴々たるものかあつた、氏の坂井郡農會の人たりしこと九ヶ年余に及びしといふ、實に此の間に於ける斯會に致されたる盡功の大なりしは周知の事實である、氏は又同時に坂井郡農會創立者の一人であつたといふ、又以て信望の如何に多かつたかを追想せしむ、犠牲の精神や社會奉仕の觀念の漸次消磨しつゝあるの時氏の如きは確かに一服の清涼劑に値するものがある、彼の足羽川及び九頭龍川の改修工事に資身を抛擲し氏の全勢力を傾注したことは畏敬の一點として紀念すべき特事なりとて當時の儕輩に唱償されし所となる、今や足羽川河川敷地五萬坪を引受くに至りて經營大に努めつあり氏は又政治に多くの趣味を有す曾ては福井民友新聞の創立に干與し拮据精勵多大の心力を呈して信望を博し、今や福井日報の監督と云ふ重任に在りて同社の振興に夙夜苦慮斜めならず、

大正十年福井市會議員の改選に際し市有志の推す所となりて立候せしか策戦利あらず氏又永く地中の龍たるものにあらず資性慧敏にして愿懿、籍を政友會に置く氏又自重せよ。

藤山幸之助氏

氏は福井縣坂井郡高椋村に生れし人、夙に漢數の諸科を學修す農を以て業となし來たりし名望家にして、又資財豊富たり、性徳博愛にして慈惠に富む、氏又祖志を承け農事に専念し、小作人を督し耕地の整理を爲し、時に或は農具の改良に意を介し、勞役及び其の收穫に對する増益を計り、作人を利せしむる効果の誠に甚大なるものありといふ、以て部民敬慕の中心たり、斯くて又公共心に富むの氏

は同村消防の創立に關しても偉大の力を致し、今其消防組頭として大に活躍するところ大なりといふ、氏は又更に同村々會議員とし且學務委員として大に公共に努力怠らざる所なしといふに於て衆望更に多く加ふる所となり、氏は又人を接遇くするの厚きこと君子の夫れの如く、且つ其の人に就いて二三の別を爲すが如きことなかりせば神の如く崇敬せらるゝも亦道理ぞかし、又丸岡輕便鐵道の敷設を爲すに付ても大に苦心する所ありて今や、同社の重役として其の要職に在り以て拮据經營大に爲す所あり、之れ實に遺産に安居して世人を輕視するの輩に比し氏の如きは實に雲泥の差がある、敢て氏の健在を祈る。

藤川喜太郎氏

氏は福井市の産、同市佐佳枝上町の人、夙に絹絲業に志し星霜幾年幾多浮沈の經濟戰に會して辛酸又枚擧に遑あらずして以て今日に至りし人、尙絹織物業を兼ねるに至り、以て斯界に聲名を成すに至りし者なり且つ巨萬の資財に富み信望一身に衆まるに至るは尋常事のことなりとするを得ず之れ氏が偉力の然らしむる所なりとす、氏又學殖識見あり交情厚く衆に阻隔なく風姿堂々たるといふにあらざるも又侵かしがたき風格を有して信賴厚き所あり、大正六年福井市會議員の改選に際し一躍市會議員の榮職を擔ひ、大正七年言には福井消防小頭に任せられ次に日本輸出綿糸織物福井縣支部代表員に推擧を受け更に大正十年の福井市會議員の改選に又々有志の推す所となりて當選し、同年舉行の同市商業會議所議員の選舉に當選するに至りて茲に當市に於ける名譽職の全体を一身に背負ひたる狀を呈し、公私共に活躍する所又淺からずといふ、氏の如きは獨り福井市に於てのみ然るにあらず、福井縣に於ての政界及實業界の重鎮として目さるべき人格者なりとす。

名 村 忠 治 氏

氏は福井縣坂井郡三國町の人、幼にして豁達不羈氣骨稜々として群童を抜く、其の郷に在るや深かく和漢の學を修め長して政治に志を寄せ自由黨員となりて各地に遊説して名聲頗る揚る、於茲乎三國町會議員に推さるゝこと三回、同町長たりしこと二回、坂井郡々會議員たること前後二回にして郡町政上に多大の心血を凝ぎ聲望更に厚きを加るに至り、福井縣會議員に擧げらるゝこと前後四回の多きに達し縣參事會員を兼ね貢獻する所少なからず次で衆議院議員に選ばれ侃々諤々の正義公道を踏んで天下の爲に盡し一世の欽仰する所となり以て今日に至りし人である、此の間三國鐵道の敷設に關し夙夜焦慮代表的辛勞の率先者なり近くは急行列車の金津驛の停留に力を盡して衆仰される、傍ら實業界に○足を伸し坂井郡砂子坂に西部電氣事業を起し更に金澤福井間の電氣鐵道の敷設を畫策し氏一世の事

業として着々其の功果を奏しつゝありといふ、今や意氣益々壯誠に敬服に値す、氏の健在は實に國家の爲め一慶事たらんは非ざるなり、年五十餘歳

山 田 甫 氏

氏は福井縣の素封家地方政界の驍將、現貴族院議員山田歛氏の令息にして同縣坂井郡高棕村の人である、幼にして慧明、其の普通學を福井中學校に修め卒へるに及び東京に負笈して早稻田大學政治科に入り幾年螢雪の功を積んで拔群の好成績を以て同校を卒業し郷に歸り獨學自修更に厚さを加ふる所となる、人爲温厚着實にして稀れに見る眞熱な學者として夙に聲望の甚藉たるものがある、氏又家業の傍ら公共の事に盡瘁すること頗る厚く曾て全國青年會創立の議起るに及び身自か

ら之れに率先して坂井郡青年會の創立に參畫し其の創立なるや會長たるの重責に當り地方後進青年の指導誘掖に努め、同地青年黨の氏を見る恰も師父に對するが如きものあり、以て氏が潜勢力の侮るべからざるものあるを知るべきなり、氏又辨舌の人なり、此の青年會の爲め萬丈のの氣焰を吐き、文名噴々として地方論壇に鳴る、又以て他の同種の者と同一視すべからざるものあり。

野 村 勘 左 衛 門 氏

正七位勳四等功五級衆議院議員野村勘左衛門氏の聲名は正に甚藉たるものがある氏は福井縣坂井郡兵庫村の人、家は縣下屈指の豪農として令名あり、幼にして濶達慧敏夙に大志を抱き郷黨の間に其將來を期待されてゐたのである長ずるに及び福

井中學校を卒するや笈を負ふて東京に出て早稻田大學政治科に入りて斯學の造詣頗る深く、郷に歸り直ちに第九師團に一年志願兵として入營するに至り順次少尉より中尉に更に大尉に昇進するに迫ひて偉功を奏したる人である、氏は平素讀書を唯一の樂みと爲し就中教育問題は其熱心に研究する所となり、氏は又本縣教育界の爲め各地に其の雄辯を揮ひ名聲一時に揚る、資性廉直氏は飽迄人格の人當世稀に見るの君子人である、現に福井縣教育副會長、坂井郡教育會長たり、氏は又吾が國情を考い農業の發達を圖るに非ざれば國富得て増進すべからずと爲し熱心大に努むる所ありと云ふ、氏が公共事業及地方發展の爲め盡瘁せしこと斯の如くにして年あり、今や一郷崇敬の一人者である、大正九年の總選舉に際し始めて逐鹿場裡に候補者として立つや得點第一位を以て首尾よく當選の榮を得たる、是氏の地位肩書を有すると其家の地方に於ける大地主として郷民間に勢力あると、學殖、識見、品性人格の高きに由らずんばあらざるなり、籍を政友會に屬して吾黨

の爲め各地を遊説して裨益する所實に大なりといふ、氏又政界の新人材たるを失はずして吾憲政の進歩に資する所なくむは已まざるべし。

下 里 宣 氏

辯護士法學士下里宣氏は福井縣坂井郡丸岡町の出身、年少にして既に頭腦明晰、天稟の才能があつた、福井中學卒業後、第四高等學校を経て東京帝國大學獨逸法科に入り、拔群の成績を以て卒業すると間もなく法曹界に入り福井地方裁判所々屬辯護士となり、頭初福井市濱町に事務所を開きしも後年福井地方裁判所附近に宏壯なる邸宅を構へ専ら民事商事刑事に關する法律事務を取扱つてゐる、而して其温容なる風格と熱誠なる精神とを以て訴訟事務に當るに於て名聲漸く地方に聞

へ衆望次第に一身に聚る所となる。

西 畠 數 榮 氏

福井縣坂井郡會議員西畠數榮氏は同郡春江村江留上の上、實業界の奇傑西畠順榮氏の令弟である、郷の小學校を出づるや福井中學校に入り卒するに及び三十六聯隊に幾年兵營の生活を續け日露戦争に出征して偉功を奏し、郷に歸り實業界に入り以て今日に至りし人である、實業界に入りての氏は曾て西信合名會社の創立に參畫し成るに及び重役となり精勵大に同社の爲め盡瘁淺からずして一大進展を招徠し、多大の功績を收むるに至る、後ち出て獨立經營に任し全力を此の一家に注ぐに於て今や本縣絹織物界の霸王を爲すに至つたのである、元來氏は所謂義理堅

き實直なる奮闘家で、又稀に見る温厚篤實の人士で又た風格堂々たり、夙に信望噴々である、又仁義に富み、常に地方公共の事に貢献する所尠なからず、其他大小の會社に關係する所多く殆んど枚舉に遑あらずと云ふ、以て氏の如何に抱負の大なるかを推知するに足る、後年政治に志寄する所となり、推されて坂井郡會議員となり現に其の任に在りて地方政界に辣腕を揮ひ郷黨の間に將來を囑望され更に一段の名聲を博してゐる、氏又福井絹織物組合の代議員にある。

柳 原 隆 氏

醫師柳原隆氏は福井縣三方郡耳村河原市の人、現代議士柳原九兵衛氏の令息なり福井中學校を出づるや直ちに金澤醫學校に斯學の濫輿を修め歸來現在の醫院を開

設して今日に至つたのである、河市は醫師尠なきと云ふにあらざるも氏の手腕に對して絶對的に信賴してゐるので地方人の患者常に殺到し、往々晝食の箸を取らぬ日もあると云つた風の盛況を呈してゐる、人爲重厚、洒脱として交情阻隔なく温容直ちに人をして推服せしむるの徳を以てゐる、又氏の聲名が嘖々たるものある蓋し所以なきにあらずと云ふべしである。

中 島 昌 夫 氏

京都電燈會社福井支社の支配人たる中島昌夫氏は福井市老松上町の人、福井中學校に普通の學を卒へるや實業界に志し、明治三十三年福井九十二銀行に樞軸を占め行運の伸展に夙夜恪勤精勵して其の功空しからず行の内外に信望を博し、更に

京都電燈福井支社成るに及び時の支社長高橋氏に簡拔され同社に入りて同社主事として同社經營の任に當りて盡功尠ならず、累進爰に支配人たる位地を贏ち得たのである、氏は又頭腦明晰にして細心熟慮眞に驚くべきものがある、氏は今や同社になくてならぬ人物として同社内外畏敬の中心と囃さるゝに至る、蓋し氏が今日に至る道程は異數の奮闘と斯界に致せる幾多の功績とを思ふ時誰かその今日あることの偶然にあらざるを覺らざる者がなからうか。

田 中 喜 三 郎 氏

現福井縣坂井郡長正七位勳六等田中喜三郎氏は同縣南條郡今莊の出身である、夙に官界に志し、警察界に入りて今日の發端を開くに至りしものである、明治三十

七年十月福井縣警部に任せられてより大正六年三月同縣警視に任せらるゝに至る迄での十餘年間は敦賀警察署の次席を振出しに縣下の各警察署長警察部の各課長を歴任して大正十年三月轉じて同縣坂井郡長の榮職を贏ち得て今日に至りし人である、此の間に屬せし氏に特筆すべきもの枚舉に遑あらざりしが就中日露戰役當時は敦賀警察署の次席として當時の署長に右して開港警察としての重責を一身に擔して遺憾なきを期し以て警察界に其の範を示し、明治四十五年後の三國警察署長としては芦原温泉發展の特命を敢行し功績著しく正に令名あり、氏の同署長たりしは實に四年と十一ヶ月の長期を算するに至りしといふ亦以て知るべきのみ、資性伶俐、用意周到、頭腦緻密にして事務的才幹に長して與望がある、他人に接するに謙讓で事務洞察の明を有し且つ經濟事情に迄で精通して居るといふ、歐洲大戰當時は警視として再び敦賀署に在りて矢つぎ早に入り込み來る露西亞の革命に伴ふ外來思想の浸潤を防遏し、敵國人の渡港、引揚人の入港等に細心の注意を

拂ひて滿全の功を奏し、警察界の威信を海外に發揮し以て噴々の名聲を揚ぐるに至る、又郡長としての氏は又郡内の信望特に厚く、蓋し氏が今日に至る前半生を通じての異數の奮闘と國家社會に致せる千万の偉勳等を掲起せば氏の今日ある偶然にあらざるを覺らざる者あらん誠に氏の如きは鷄群の一鶴とも云ふべき異數の人士である。

岡田 總太郎氏

氏は醫師なり、福井縣坂井郡春江村沖布目の人明治十五年十月に同郷に生れしものなり、着實眞摯眞に敬服に價する人格者なり、幼より學を好み福井中學校を卒業するや明治三十三年七月金澤第四高等醫學部に入學し、大に醫學を専修し苦節

幾年切磋の功空しからず、明治三十八年九月優位を以て同校を卒業するに至りしものなり、明治三十八年十月學術應用實地研鑽のため金澤病院に職を奉し滿一年余に及びて歸郷し、明治三十九年九月生家に開業をなすに至りしといふ、氏の家は舊家にして一郷の豪農たり信望祖より厚く、其の公共に致せし事蹟又祖より歴然たり、氏亦祖志を繼ぎて心を茲に持すること堅く威敬益々加はるに至る、温厚なる氏は病者に對する叮嚀親切は非常に厚くして且つ献身的に其の職に忠實なり現に同郡大石村學校醫、同郡磯部村學校醫、同郡春江村醫及び學校醫、同隔離病舎委員を囑托兼攝するに至り、且つ坂井郡醫師會評議員に推舉されたる、氏は同郡十郷大堰用水議員に選囑され、公私共に多忙にて殆んど吐哺握髮の閑隙を見出し得ざるが如き多くの事務を一身に擔して切り廻はして遺憾なく、氏に又侮り難ひ敏なる手腕を宿して得て信賴更に深かきを加ふるのみ、氏又一郷に於て政治の中堅に擬せられて大正八年九月福井縣會議員の改選に際し郡有志の推舉せし所と

なりしも週圍の事務に顧み立候を辭して他に譲りたりといふ、遜讓美德の持主として以て信厚あり。

前田太吉氏

氏は福井市手寄中町の人、福井縣足羽郡六條村蒔生田の産、前田多平氏の三男なり家は農を以て業となすも氏は農事を好まず資性慧敏にして且豪膽なり、理智に富む所あり明治三十五年單身福井に出て羽二重業の研鑽に専念せり、艱苦幾年ならずして獨立して開業を爲すに至りて大に得る所あり、更に絹織物工場を同市豊島中町なる足羽川地畔に建設し、茲に百臺に近き機臺を据へ付け優良なる工女を以て之に當たらしめ製産意の如く増殖し、併も優良品の産出極めて多かりしたため

利潤は水の順に流がるゝが如く順調を失はず、遂に今日の大成をなすに至りしといふ、之れ一に氏の勤格の依て然らしめし所以なり、後ち福井薄絹合資會社の創立をなし大に努めし所あり、資財豊富なりしたため事物意の如くに動き以て中央斯業界に信望を博するに至る、氏は昨年市會議員の改選に際し有志の推舉する所ありしが、時期未だ熟せざるの感を以て辭して立候せざりしとは飽くまでも氏の性格の非凡なるを示すに悖ならざるものなり、氏の實業界のみならず更に政界に驥足を展はし大に活躍する所あらん氏は又金澤十軒町に取引所仲買店を開業し盛に人氣を招來してゐる。

石 田 義 信 氏

氏土木建築請負業者なり、福井縣吉田郡岡保村宮地に生れし人、福井市中島口觀

音町に居を構へ之を以て請負事務所に充當せり、氏は天資豪邁沈毅にして俠骨稜々たる所あり、家は一郷の舊家にして相當の資産家を以て目せられ代々農及び山林を以て業とし來たりし家、氏の父君は數次名譽職の位地を占め現に吉田郡會議員の榮職にありて大に公共に力を致すといふ、氏も亦父君と其の業を共にし來りしが一朝身を海軍に投じてより歸來其の職を別にして殆んど獨立の感あらしむるが如き状態を呈するに至り、村の役場に在勤せしこと數年、氏は幼より學を好み漢數の學を造詣する所深く就中數學には最も長たる所と聞く、後ち幾何もならずして其の役場を辭し柄にもなき請負師となつて今日至りしものなり、氏は開業直ちに福井縣農林學校建築の入札に勝ち冒險一舉にして竣工を告げたる英敏なるに、同業の先覺者をして驚愕せしめて自然に後輩たらしめし風を添へ、氏が此の最初の壯舉に震撼したる世人は請負業者の童神の如く視感し従つて建築の申込み各所に起りて益々威望を増し遂に縣内外に知渡するに至る、今や福井縣管内の

鐵道指名請負人たる特別なる地歩を占むるに至りしといふ、客年福井縣廳の移轉及び廳舎の改築あるを知るや一蹶直ちに其材料の豊富なる臺灣其他の地の視察を遂げ歸朝間もなく請負入札の手續に迫ふなど到底も素人あがりの氏とは思はれぬと人をして舌を巻かした程の迅速なる英斷快舉であつたといふ、今や此の擧空しからず其の竣工に英力を全注しつゝあり、氏亦涙に脆き人、路者の乞ひに必ず背かずといふ慈愛心深く曾て公私に義捐寄附せしこと一再に止まらず、此の智徳全備の氏は風貌又堂々として異彩あり、氏又た趣多味にして曩きに絹糸羽二重業の合資會社を起して殆んど別人の如く同業に勉勵せりとはどこまでも其の非凡なるに驚かざるを得ざる當今珍らしき奇快兒たり、大正十年五月福井縣土木建築請負組合幹事に選舉されて信望あり、氏未だ年若ければ遼遠なす所方面によらず必ず偉大なるものあるは期して疑信なき所なりとす、氏又健在せよ。

廣 田 稻 吉 氏

氏は福井縣足羽郡和田村下北野の人、同郡酒生村の豪農池田七郎兵衛氏の令弟なり、後ち廣田佐十郎氏の婿養子となりて其の姓を繼ぐに至りしものなり、養家又氏の生家に次ぐる一郷の名望家たり、且養父佐十郎氏は曾て郡會議員、縣會議員として公共に致したる功勞者たり、氏の資性温良にして率直、福井中學校を卒業するや令兄池田氏に従ひ福井九十一銀行に入り恪勤精勵、業務の旁よく出て、斯界の爲めに寄與する所少からず、ために行の内外に信望を博し以て同銀行の支配人たる要職を任するに至る、蓋し故ありと云ふべし、同銀行今日の盛展を見る、少なくも又氏の先天的英才と其不斷の努力とが相俟つて招徠したるかは筆者の常に感激する所である。

田村春吉氏

福井市會議員田村春吉氏は同市豊島下町の人、夙に實業界に入り絹織物及び絹糸の販賣業者として、着實なる發展振を示し斯界の重者として著しき頓勢あるに至つたのである、併し氏が數年間の過去は斯業界の不況時が多かつたので、一時斯業を中止するの悲況に沈淪したことさへあるが、氏の堅實なる思素は惡戰苦闘夙夜斯業の研究に想到し大に得る所又尠からず、釋然として挽回せり氏が過去三十有餘年の生涯を通じて如何なる艱難に遭遇し、苦闘に臨むも曾つて人生の岐路に迷はず一路爰に奮進したのである、今や豊富なる資産を積むに至り大に信望を博するに至つたのである、資性温厚篤實にして百折不撓の氣概あり、蓋し氏が今日の成功又所以なきにあらずと云ふべし、氏は大正十年福井市會議員の改選に際し有志の推舉あると共に大多數を以て當選の榮を得たる衆矚の人である、氏は又福井縣絹織物組合代議員である。

西島順榮氏

事業界の泰斗西島順榮氏は福井縣坂井郡春江村江留上の人、幼にして穎悟夙に大志あり其の中等の學を郷に卒へるに及び兵役に服し除隊後更に文華に親しみしが飄然として實業界に入り、獨立して絹織物業の開始を爲すに至りしものなり、氏の家は一郷の舊家にして夙に豪農を以て令名あり、斯業に無經驗ながら豪放豁達なるの氏は更に其の内容の充實を期し躍進的發展を期する意味に於て大正初年福井縣下に什儔なき一大工場を氏邸の南方に建設し四百に近き機臺を以て内充し之れが組織を西信合名會社に変更して其の面目を一新すると共に、自身社長となりて社務を總覽し令弟某氏をして取締役とし實務を處理せしめ數百の事務員職工を使役して盛んに活躍を試みて居たりしも現時は之を氏個人の經營として其の跡を持續するに至りて非常なる發展を招來して居る氏は人格崇高にして斯業を視る

傍又出て社會公益の爲めに盡す所甚大である、又他面に於ての氏は事業界に活躍し、福井燃糸株式會社、越前石材株式會社、上毛燃糸株式會社、上村島崎會社、各創立に參畫して各其の重役となり機略縱横盡功亦少なからずして噴々たる信望あり、氏亦公私共に寄與せしこと一再に止まらざりし俠義性の人なり、而して其言動活發にして生氣あり以て上下の氣又け甚好なり、氏は又政治に幾多の好感を宿し得て郷黨の間に其の將來を囑望されて居る、氏は曾て日露戦役に出征して偉勳ある歩兵曹長格である、又以て氏の健在を祈らすんばあらざるなり。

義江佐次兵衛氏

酒造大家たる義江佐次兵衛氏は福井縣足羽郡東郷村の人、家は一郷の舊家にして

酒造家を以て令名あり、氏は幼にして穎敏頗る機略に富むの風あり、大野中學校に普通學を修學し、卒へるに至り東都に志させしも氏の家情之れを許さず、郷に在りて獨學自修すること頗る厚く、人と爲り温厚篤實且つ慈愛に富み、郷黨に致せし寄與亦一再ならずして大に信望あり、氏の前途洋々として春海の如きものあり年爰に二十餘歳。

青柳俊範氏

氏は福井縣坂井郡春江村東太郎丸の人青柳万郎氏の二男なり、世々代々農耕を以て名あり、資財は區内に於ての第一位を占め田甫又豊かなり、其小學校を卒業するや次て福井中學校に入り業を卒へるや父志を繼ぎ家に在り、家業を助けかたは

ら讀書に耽溺したる人、資性温良にして事理に堅く、正理直行なり氏は大正十年九月同く青年會長に推選せられ大に活躍する所ありといふ敢て氏の前途を祈るものなり。

佐藤新吉氏

世上幾多の事業家あり商業家あり以て多くの資本を供してなされあるも其の功績の乏しき中に僅少の資本で數萬の財を積みたるは福井縣坂井郡春江村東太郎丸に生れし同氏のことである、氏が絹織物業開始の當時は斯業また甚だ幼稚にして殆んど絹糸羽二重業者の命下に於て爲すが如き幼体にして、然れば原絲、生産品の賣買に困難苦心されたるは非常なものにて、延て事業に蹉跌を來し意外な損害を

蒙りしこと一再にあらすと云ふ。成功の裏らにわ幾多の辛酸を嘗めねばならぬことこの多かるは敢て氏のみに限りにあらず、世間多くの此の種の人にはまた寄り多く此の軌を踏まれたことであらう、氏が三十餘年間心血を注いで築き上げた現在の資財は百萬長者のそれより見ればこと少なるが如くなるも氏が斯業の經營に盡されたる多くの艱難は百萬を積みし經路も同一なるに於て一筆に價ひすべく氏の信望は今や大に加はり機を見るに敏達なる氏の將來に見るべきもの多からんとす、敢て氏の益々發展を祈りて止まず。

青柳彌十郎氏

氏は福井市元三上町の人福井縣坂井郡春江村東太郎丸に生る青柳彌五右衛門氏の

長息にして氏の幼時は区内一の豪農にして村内富者の一位たりしが長者百代續々かすの例に漏れず父彌五右衛門氏病氣の人となるや不詳事百出して此の一家を碎かすんばやまざるの形勢となり、幼時の氏は如何とも爲すに由なかりしが遂に福井の山田半造等の占領するところの物となり、されば誰一人近寄る者とてもなき昨日にかわる今日の悲惨な境遇を其儘に十二歳の春を一期として病者の父と共に此の村に最後の別れを告げて福井に出たのである、富者育ちの氏は其の日から佛檀塗師の下に弟子入れなして此の間幾多の苦心慘憺業を脩め今では斯界の大王と言ひ囃される位ひの人となつた、氏は資性剛直にして言ひもし行なひもすると言ふ佛檀師には變り者と言はるゝ氏は飽くまでも變り者で人の世話から寺の世話から器物の世話から猫の世話までせねばをかぬと云ふ世話好きである、氏は時には政治を談じて政界の専門家を呆然たらしめしことさへありと聞く、氏は今や松本全体は言に及ばず福井全体に進んで此の世話すきの本領を市政界に發起せんとして

意氣軒昂である大正十一年六月區長に推舉せられて公共の爲め更に努力を惜まざるといふ。

牧 本 薫 氏

氏は福井縣坂井郡春江村藤鷲塚の人父命を繼ぎ幼年の頃より酒造の營業に従事され今日に及びたる人なり、氏は資性柔順にして温厚徳實なり、資産豊かにして富の占有者たるの氏は業務の餘暇學務委員の職にありて努力大に忠實なりといふ、氏又學識高く時勢を遠觀するの明あり、村内の囑望又淺からず、大正十年一人の競争者なく同村々會議員に當選し現今其の職に在り、氏の人格識見は今や識者の認むる所となり、氏の政治的生命は今日以後に在り、今後の活躍期して待つ軒昂

北 林 肇 氏

氏は福井縣坂井郡春江村松木北林清左衛門氏の二男にして温容篤實の人、家は此の地きつての豪農たり氏は村の小學校を出て福井中學校に學び、卒業後東京に出て法律政治家たらんとして某大學に入學せしも、家事の都合は氏の身邊に迫害し氏をして餘儀なく中途退學のやむなきに至らしめ、後年官界に立身せんとせしことありしも之れ又氏の社會的根底を爲すに足らずとし、心機一轉茲に絹織物を開始し、場所を其初め同村上村に設けしが地点の都合上更に吉田郡森田村定政に移し以て今日の大成を爲すに至つたのである、斯業に經驗なき氏には其間幾多の苦

節をなめ百難來襲も意に介する所なく、一年一日の如く最初を精神を撓捲せずして發揮し、其効空しからず數年ならず今や氏の社會的地歩の根底の一端を厚くするに至りしは氏の爲め慶すべし。

高 谷 常 吉 氏

氏は福井縣坂井郡東十郷村に生れし人、幼時現今の福井市江戸下町高谷家に養子されたるものにして資性潤達にして英氣颯爽たり、氏は又用意周到にして常に政治に志し、時事を慨し公共的貢獻に富むの風あり、氏は海國青年團を福井に組織し同志を叫合せしこと二百余名に達し、時には集合を催し海國民の青年志氣の振興に努力し、又先年監獄移轉問題赤十字病院問題火災豫防問題等に關し、自費を

投して市民大會を市内の各所に開催し、旺んに常局の措置の宜しからざりしを演説し、此の間幾多官權の壓する所ありたりしも意に介せず持論を透徹し、市民の爲めに全力を盡したる偉大なる近き歴史を有す、氏は大正十年市會議員選舉に激烈なる競争に打ち勝ち大多數を以て當選の榮を擔ひたるものなり、之れより先き氏は四五の同志と相圖り福井立憲青年黨を策し、東奔西走の結果當市に於ける大政黨の樹立さるゝを見るに至る、氏の政治に志したる遠き以前にあり、如斯政治に強烈なる氏は今や福井市政の壇上に立つ、見るべきもの更に多からんとは識者の早く既に認むる所となりて以て唯やさるに至る、而して氏は憲政會に入會して公然政友會と鬭争せんの意氣を公示せり、氏又辨の雄たるの人壇上異彩を飾るに妙藝の人にして市民寵兒の一人たり、氏の今日あるは異數の奮闘と郷土に致せる幾多の功績を思ふ時誰か其の今日あることの偶然にあらざるを覺らざる者あらん、氏今後の活躍を期待すると共に福井市會議員たる氏の發奮を祈るものなり。

奥田 繁 氏

氏は福井市佐佳枝下町保生堂藥院の主人にして福井縣坂井郡本郷村八幡に生れし人なり、資質温良着實眞摯眞に敬服に價する人なり、氏は少年にして東京に出て東京醫學校に入り醫學を學び醫師試験を受験せしも學術利あらずして一敗して引續き初期の貫徹に怠らざりしが兵役の關係上意の如くならず尙兵種は三十六聯隊看護手にして研鑽學上大に貢献せし所ありといふ而して中止されたる儘に今日に及びたるものなり、氏は尙ほも初志を斷せず準備怠りなく研究に餘念なしと聞く又氏の郷家は屈指の資産家にして部民敬意の中心たりと言ふ、氏の福井に於ては坂井郡郷友會の幹事として又郷友に信用厚き人なり、切に氏の發展を祈りて止まざるものなり氏又健在せよ。

吉田金右衛門氏

氏は福井縣坂井郡棗村の産にして酒造を以て業となす坂井郡西部における豪家に
して名望あり、天資柔順にして敬愛せらる、漢籍の造詣深く、村會議員、郡會議
員に選ばれること前後數回に及び、大正十年には所得税調査委員の選を受け、更に
大正十年十二月藤田一氏の病歿するに當り、之が補缺選舉を行ふに會す、氏は又
藤田氏と同志の間たり、依て其志を繼ぎて候補に立つや、全郡一致の賛する所と
なり、一人の競争者なくして首尾よく當選の榮を擔へり、現福井縣々會議員たり
衆望の厚きこと實に此の如し、籍を政友會に置く。

齊木小太郎氏

氏は福井縣足羽郡和田村下北野の人、率直にして氣概に富み、時流に媚ひす、人
に依つて事を二三にするが如きことなく、其の風貌は故吉田圓助氏に彷彿たる所
あり、家は農にして資産豊かに現に九十一銀行監査役として名聲同地に噴々たり
氏は政治に多くの趣味と經倫を有し、地方に盡せしこと一再にして止まらず、曾
ては村會議員、同村長に推舉せられしこと數回に及びたり、氏は漢籍の造詣又頗
る深く、更に同郡會議員に選舉せられ郡參事會員を経て郡會議長の椅子を占め今
又所得税調査委員を兼ねるに至る、衆望を一身に聚め今や同郡の元老株を以て目
さるゝに至り、人格崇高の中老人は同郡政友會園内の中堅たり敢て氏の健在を祈
る。

酒井定一氏

氏は福井縣坂井郡磯部村横地の産、家は世々農耕を以て業とせしも氏又鋤鍬を以て終始するを好まず、茲に心機一轉志を實業界に寄せ羽二重絹織物業を開始するに至れるにあり活躍大に得る所ありて信望を博し氏又寡言着實にして實行の人、事に當たりて逡巡せず、英斷にして氣骨稜々たる所あり、且つ仁侠に富むの氏は谷口氏經營に係る福井毎日新聞の經營困難を見て之れが救済に努め自から金若干を投じて同社の挽回に致したる犠牲的精神は雖て同社延命の由因たらずんばあるべからざるものありき、又公私共に義捐せしこと一再に止まらず極めて慈愛に富むの士なり、此の人今や此の地に於ける斯業の大成を以て目され衆人羨望の中堅たるものなりと云ふ年未少く前途更に見るべきものあるならん。

岩崎定一氏

新聞記者岩崎東風氏は能文家として又言論家として今や郷黨に鳴る、東風は實に氏の號なり、氏は福井縣坂井郡鳴鹿村下久米田の産、家は代々農を以て業とし來たりしもの、併も名望ある舊家にして一郷畏敬の中軸たり、氏は夙に政治に志厚く、善く時弊を慨して痛く論究す、氏は幼より學績良く、長じて福井市北陸中學校を優に卒業し、笈を負ふて郷關を出て、東京中央大學に政治經濟學を専攻して大に得る所あり、大正七年歸郷して福井毎日新聞社に入り氏獨特の政治部を擔任し政治部長として大に權威を揮ひしことあり、大正八年九月新愛知新聞社に轉じて爲す所ありしも越へて九年九月同社富山支局長として富山に轉じ、日刊富山タイムスの主筆を兼するに至り縦横峻辣の手腕を揮ふて天下の人心を戰慄せしめたりしことあり、以て令名あり、辭すること大正十年四月にして郷に歸り、生郡丸

岡町を根據として北陸評論社を創立し拮据經營今日に到りしものなり、資性率直にして毫も粉飾を見ず、且つ人に接して城府を設けず恬淡殆んど十年の知己たるが如き感あらしむ、今や威名を一郷に博してゐる。

高津與三右衛門氏

福井市會議員たる高津與三右衛門氏は福井市毛矢町の産、長ずるに及んで實業界に志あり家は氏の祖より金箴製造を以て營業とし來りしなり、福井市に於ける金箴製造は氏の家を以て最も祖司とする所となる氏又一人の母に孝養頗る厚くして親孝行の令聞あり、氏亦祖志を承けて斯業の繁盛を畫策し大々の改善を加へ夙夜拮据奮闘努力製品の優良に専念の結果遂に今日の發展を招來するに至つたのであ

る、今や多くの職工を使役し資産方さに數拾萬圓と稱されてゐる、資性敦厚にして仁俠に富む所あり、公私の別なく常に力を茲に致し太に信望を博し自然に人をして推服せしめて方さに大に名聲の噴々たるものがある、大正十年福井市會議員の改選に際し有志の推戴する所となり、立候して大に優勢を以て當選の榮を擔ふに至り、現に其の位置に在りて市政の進展上に多大の貢獻をなされつゝありと云ふ氏は又福井消防小頭に任せられ火防上に努力する所衆を超越してゐる實に謹直義富の氏の將來に期待するもの多かりしならんやである。年三十八歳

大井猪三郎氏

福井商業會議所議員大井猪三郎氏は福井市老松下町の人、洋服調製及び雜貨店を

獨立して開始したのは今より三十年前の過去のことである、氏の營業振は常に信義を始守し努力専念、廉價なる製品を提出せんとするものがある爲めに外ならぬのである、其の堅實なる營業振りと製品の價値は日と共に著しく發展を招來し、目下多數の職工及び店員を驅使して奮勵活躍大に努むる所あるも尙輻輳せる注文に逐はれてゐる盛況は實に驚くべき程である、今や巨万の資財を積んで和氣霽々たる家庭を作るに至り、信望日と共に加へつゝあり、氏は大正三年頃より福井消防小頭に任せられ更に努力を此の上に注ぎ信頼を厚くし現其の職に忠なる人、大正十年福井商業會議所議員に所得稅調查委員及同會長に各推舉されて斯界の爲め其の蓄積せる識見と手腕とを發揮しつゝありといふ、敢て氏の成功を祝福するものである。

川森伊右衛門氏

川森伊右衛門氏は福井縣棗村市の瀬の人、夙に農事に従事し旁ら同村役場に出勤して村内の氣受け非常に善かりし人、家は代々農を以て業とし來たりし相當資財ある舊家なり、幼にして聰明慧敏既に滿服の霸氣あり、長するに及んで三十六聯隊に入營し精勵群を抜き以て僚星の間に燦然たり、明治三十七、八年の日露の役に從軍し大に戦功ありて順次として軍曹に累進するに至りしものなり、其の隊を出づるや郷に在ること少時にして負笈して東京及び横濱に出て一轉實業界に志せしも氏の性格の許す所にあらずして軍隊に酷似の警察界に投して所在横濱に在ること數年にして郷に歸り以て今日に至りし人なり、氏や頭腦明晰にして機略縱横事に臨して鬼謀立ち所に成るの概あり、今や信望漸く厚きを加ふる所となり村有志より村名譽職に推薦されしことさへありといへば氏の前途必ずや見るべきもの

あらむとす。

松山染吉氏

福井市會議員松山染吉氏は福井市氷川町の人、明治九年十二月十八日福井縣足羽郡下文珠村下河北に生る、幼にして滿腔の霸氣あり、農家なりしも青雲の志勃勃として禁し難く、年二十歳前後にして福井に出て今の所に羽二重絹糸業を開始するに至つたのである、當時の氏の恪勤精勵は實に驚くべきものがあつた、斯くして氏は二十余年の久しきに亘つて、只一心不亂に、斯業の進展に粉骨碎身の動体を通したのである、現に巨萬の資實は氏の功勳として燦然としてゐるのである、蓋し氏が今日の成功は全く此の間に於ける洗練されたる斯業の經驗と非凡なる天才的炯眼とを以て、堅實なる營業方針の下に、躍進的努力を試みた賜と云の外ないのである、實に過去二十余年は氏に取り極めて意義ある生活であつたのである、氏の天資温厚篤實にして公共的道義に厚き人である、依て氏の信望は日と共に益々深厚となり、過去十余年の間福井市會議員の改選ある毎々に一人の異議なく満場一致の推舉する所となり市會議員に當選せしこと引續き四回の多きに上れりと云ふに於てするも氏の如何に衆望の厚きかを知るに足る、此の間市參事會の要職に在りしこと二回、又區會議員に舉げられしことあり、明治四十二年より福井商業會議所議員たりしこと引續き二回、福井橋南織物第一部長、現に福井橋南精産組合長の位置にありて努力大に盡せりといふ、誠に氏の如きは獨り政治界の人たるのみならず實業方面に於ても重鎮され居ることは言辭を以てする迄もないのである、又赤十字病院赤坂新設に付ては万全の力を注ぎ其の功を奏し名聲を廣博しある所以又爰にある、更に氏の將來を祈りて止まざるものなり。

橋 本 博 氏

氏は福井市寶永上町の人、舊福井藩士なり、年少既に俊髦郷黨の間に將來を期待されてゐたものである、其の福井中學を卒へるや、一年志願兵として第七聯隊に入營し、少尉に昇進し、三十六聯隊に轉して日露戰役に從軍し大に戰功ありて中尉に進級し從七位勳六等及び一時金を賜はる、郷に在りては在郷軍人分會長として軍紀の振肅に貢獻せり、資性活潑にして事物に阻隔なく、且つ恬淡寡慾、氏又政治に多くの趣味を有し、曾ては北陸新聞福井支局長とし、新愛知新聞福井支局長たりし當時は施政の方針に對し大に筆誅して令名あり、大正六年には衆望の蒐る所となり福井市會議員の人となりて市政壇上に市會の權威を振ひ、更に當時の問題たりし赤十字病院、精練會社の敷地設定につき市内の各所に獅子吼して頓に人氣を蒐集して福井市の爲め、多大の勞功を致せし氏は今や市會の圏外に在りて

陰に陽に市政の革新に献身大なりといふ、氏又健在せよ。

吉 田 義 政 氏

吉田政義氏は福井縣坂井郡本郷村荒谷の産、夙に名望ある舊家にして一郷の豪農たり、幼にして英達不羈、常に學業に志を寄せ大に修學する所深くして令名を博し、漸時勢力を區内に扶殖するに至りて村名譽職に推されしことありしも其器にあらずと謙遜し、村機關の後背に在りて村治上大に爲す所深甚なり、曾て犠牲的村役場員を勤務せしことありて部民に供せし便益又少なからずといふ、今や山林及び農事の扶植改良に腐心しつゝある有爲少壯の氏の將來に期する所があるとする。

河合久作氏

福井市會議員の河合久作氏は福井縣足羽郡酒生村の産、福井市錦下町の人、氏の家農を以て業たりしも氏は農事に専念するを好まず年二十余歳にして福井市に出て、某呉服店に入り、居ること十余年、十年一日の如く格勤精勵以て遂に主家の寵遇篤く、信望の噴々たるものがあつた、其後今の所に呉服卸業を開業するに至つたのである、過去十余年間に於ける氏の絶對的信用は極めて高調に其の發展を招來したのである、今や豊富なる資財を有して同市の斯業界に重きを爲されつゝあり、大正十年福井市會議員の改選に際し有志の推舉せし所となり、優勢を以て當選の榮を擔ひ、現に其職に在りて大に市勢の發展に心念されてゐる、人爲謹直にして身を持つること嚴にして人を俟つこと寡にす、敢て氏の爲めに其の成功と健康を祝福す。

多賀勳氏

氏は福井縣今立郡上池田村水海の人、慶應二年六月六日部子山より水源を發せし足羽川に沿へる同縣大野郡下味見村東河原に生れし清水太左衛門氏の四男なり、氏は末子の故を以て賢母みゑ子の君に最も寵愛せられし所となる當地の小學校を卒業するや同縣南條郡武生町酒井松溪氏に就き漢學の造詣頗る深かく明治十七年福井市に出て、福井師範學校に普通の學を修め業成るに迫りて同縣大野郡内の小學校に教鞭を執り小國民の教養に努むる數年同二十四年同縣今立郡内に其職を轉じて小學校長の位置を占め此の間前後二十余年の久しきに涉り同四十五年三月朝鮮普通學校長に轉じ江原道内に職を奉せしこと五年にして桂冠し而して朝鮮各道及び南滿洲の一部を視すること凡そ半歳にして各種の研學を遂行して歸黨するや直ちに郷黨の囑望する所となり青年團長に推舉せられ青年指導の任に在ること數

年氏又敬神の念深く此の間大正六年歐洲戰亂の生みし世界の形勢に會し體育獎勵の結果登山熱の高調せし時に當り氏は夙に由緒歴史を有する部子山道路の前棘荒廢して人跡稀なるを嘆し神靈奉仕の心念より原神職及び現部子山副會長田中氏其他の有志と相謀り奮起以て道路の開鑿を斷して諸人神道の登攀を容易にするを得たる美舉を初めとし部子山の復興に心深く持するも一人の微力の能く及ぶべくもあらずとし敬神の念に富むの氏は卒先區會を開き和協の上委員を舉げ事所の理經に當らしむ此の時氏は委員長に推薦せられ以て本會創始の重任を負擔し縣の指導を仰ぎ部子神社復興會は爰に組織するに至りしといふ、之れ偏に諸士の力預り多しと雖も氏の努力に待つ又多大なるはいふまでもなし、而して氏は今立郡各町長に謀り部子山復興會長に同郡長小田鐵次郎氏を公認推薦し同副會長に田中治郎左衛門氏當選氏又衆望の囑する所となりて同會幹事に推薦されこゝに氏多年の懸案たりし同會の成立進展を見るに追んで氏の能く萬事に熱烈なるの致す處なりと

知るべし而して現時の氏は一身を捧げ同會幹部の全員を代表し縣下各地を奔走し部子山神社の由緒來歴等の宣傳に曰く『斯くも越前人士の爲めには最大恩人たる繼体天皇、及其元妃日子媛命を祀れる社にして而も昔時國中の崇敬淺からざりし証左歴然たるものを如何に時代の變遷とは云へ徒に荒廢に歸せしむるは實に神靈に對し恐懼に堪へざるは勿論昔時之を祭りしは祖先並に慶應年代再興の有志諸君に對しても亦慚愧の極みなれば如何にもして之を復興せざるべからずと確信し此敬神崇祖の思想を一般に向上せしめ徹頭徹尾之れを復興すること須らく縣民當面の責務なりと喝破し、互に奮勵努力趣旨を徹底し誓て成功を期し神慮を慰むべしと、又百聞一見に如かざれば國人たる者是非共夏季に於て晨朝登山を決行し雄大なる日の出の壯觀を拜し云々、又國內の眺望は勿論東南は遠く「日本アルプス」の諸嶺より西北は遙に日本海の風景を一時に收め無限壯快の感に打たれ浩然の氣自ら旺盛なるの時此處に祀れる神前に跪き御功勞を追懐し高恩を拜謝し冥護を祈

るべし然すれば則ち身心共に必ず健全を保ち得べく加之不知不識の間崇高の觀念を養ひ得べしと説き」而して各學校、在郷軍人等、青年會、其他の團體等に向つて熱烈眞摯に之を勧誘鼓吹し併せて時代思潮の善導に努めつゝあり如斯珍物なる氏は又廣く方面の交際を求め和歌の道にも秀出る所あり其詠草中部子山に關する二三を擧ぐれば

△神社由緒、 部子の嶺に祀れる神はゆかりある

△祭 神、 部子の嶺にまつれる神の御名問は、
國の鎮めの跡とこそ聞け

△登山勧誘、 男大迹目子、猿田の三柱
ならひなき大き尊き部子か嶽

△同 諸人登り神詣うでせよ

東天の千變万化見たき人部子の

△同 高嶺にお日待ちをせよ
一目にてあるふすの峯

△奥院改築、 日本海眺めたき人部子登りせよ
新らしく立てまつらん

△赤 心、 我はたゞ赤き眞心一條に
部子の嶺の古ひ果てたる神の宮居を

△神明知心、 世の人は白痴狂者と笑はんも
部子の御神のためにつくさん

我か眞心は神を知るらめ

又氏の家は池田郷内に於ける舊家にして資財豊かなり世々農を以て業とせしも氏は家事一切を嗣子に委ね一身を犠牲に供し社會奉仕の覺悟を以て常に東奔西走専ら復興事業に熱中なりといふ氏は資性穎悟篤學にして俠氣に富み社會公益の爲め

には勞資を惜まず爲めに世の信望を受くること淺からず、學業は普通學を修めし傍ら法學を修め殊に精神科學を研究して造詣深し、又謠曲に興味を有せしも近來は會務の爲めに殆んど之を研究するの邊なしとの事である。

多田義孝氏

氏は人と爲り温厚謹直にして自ら求めて人に交はらざるも人一度此氏に接するや眞に舊知の如く貴賤を論せず貧富を言はず能く人を容るゝの宏量を有するに至つては諸人齊しく稱賛せる所なり、而して母に事ふると極めて孝にして外より歸れば先づ母の室に到りて温言世情を語り内に在りては妻子をして母を安んせしむ官將に之を彰表せんとするの議あり未だ事彰れずして母已に没し病哭して己まざる

こと久しく人爲めに感泣するに至れり。

氏は幼より讀書を以て己の業とし人を教育するを以て己の任とし福井中學より京都第一中學を卒業して以來獨學研鑽小學校正教員の試験に合格して福井市花月校に教鞭を把り校下の父兄皆悦びて慈父の稱あり、明治卅五年文部省習字科檢定試験に合格し明治四十年聘せられて福井中學校教諭となる爾來十有五年精勤の譽高く、又殊に國漢の學に淵く漢籍は山本木齊富田鷗波に學び國學は河津直入に師事して又遠く東京帝大教授小出粲久米幹文氏等に就きて歌文を研き詩漢の如きに至りては東都の名士森槐南永阪石埭矢土錦山等に師事して頗る妙致を得るに至りしは當時の鷗夢新誌及浪華の浪華文會新誌中に證明せらる、嘗て富田鷗波に冬日宿山寺てふ五言律詩の添削を乞ひしに鷗波先生激賞措くなく酒に別腸あり詩に別才あり君の詩豈其別才なるかなと是より先生詩を詠せらるゝ毎に氏に原稿を示し以て如何となすと談せられたりと、氏が唐書漢籍を讀破せられ居ることの多大なる

こと決して過賞に非ざるなり、書道に至りては東都諸大家と相通じて斯道の發展につとめ故巖谷一六翁來福の時氏は直に教育勅語漢譯を楷體にて淨書し以て批評を乞ひしに翁直に筆を把りて別箋に一詩を艸し大に賞獎せられたりと、日下部鳴鶴翁に接せらるゝこと前後數回能く筆意の勁健なる所を會得せられ人の氏に揮毫を請ふもの頗る多し、氏が碑文題字の揮毫石刻に上るもの處々に之を看る、氏は實に世に隠れたる君子と謂ふも溢美にあらざるなり斯の如きの人以て眞に青年の思想を善化せしむるに餘りありと謂つべきなり、氏の宅は福井市江戸上街に在り隱棲悠悠偏に育英の道に従ふのみ年齒正に五十有二なりき。

秋 田 吉 平 氏

秋田吉平氏は福井縣足羽郡木田地方の人、氏の家代々農を以て興りし舊家にして夙に郷黨の間に重視さる、長するに及び近衛歩兵第三聯隊に軍籍し精勤群を抜き累進して歸るに至り、福井に足りて直ちに絹絲織物業界に投し、あらゆる慘苦を嘗めて之が研鑽の功を積み、以て今日に至りしものなるが、曾ては福井商事會社の創立に參劃し其の設立するに及びては之れが専務取締役となり、爾來同社の進展に刻苦の經營を致せし結果其効空しからずして爰に相當の地盤を築き上げたる折りしも、歐洲戰亂終熄後の我が一般の經濟界は非常なる狀態を以て逆轉し同社解散の運命に會するに至りしが、氏が独自の經業は牢固として泰山の如きものあり、人と爲り伶俐にして温和遜讓、微笑を含んで人を迎へ、其の語るや些の阻隔なく方さに春風の油々たる如きものあり、大正六年には福井市會議員に推舉され同時に福井消防小頭に任せらる、又福井絹織物組合代議員たり、共に現其の任にあり盡瘁渺なからずして嘖々たる信望あり、氏又學識智能の人格者なり、今や福

井市木田氷川町に豊富なる資財を有して圓滿なる家庭を結んでゐる。

恩地政右衛門氏

氏は福井縣大野郡の産、同縣坂井郡高椋村舟寄の人家は農を以て業となす資産豊かにして地方敬位の中心たり、福井中學校に普通の學を修め卒業して同郷に漢學の造詣深かく常に政治的色彩を帶ふ、其の後推され同村助役となり同郡々會議員となり更らに郡參事會員となりて地方の公共に盡せしこと甚大なり、氏は衆望漸く多きを加へ人格凡を抜く従つて大正八年縣會議員の改選に際し同郡有志の推薦するところとなりて其の選に當りし現福井縣會議員たる氏は更に來るべき改選に衆望を擔ふは今より知るべきのみ、敢て氏の自重を祈る。

清水春松氏

氏は福井縣鯖江町中小路の人明治十六年四月を以て生る同縣今立郡味真野村荳谷清水庄左衛門氏の二男なり、家は農を以て業となせり、氏は鋤耨を以て起つを欲せず小學校卒業するや醫界に志し、明治卅二年同郡粟田部村醫師重野祐藏氏の藥局生となりしを抑も其の最初の振出しに、越へて翌年南條郡武生町醫師水野桃太郎氏の藥局に入り、醫學前期學科の研究を爲し修學四年に涉り、同三十六年十一月大阪中の島公會堂に催されし醫術前期開業試験に登格し同年十二月鯖江三十六聯隊に看護卒として入營し、日露戰役當時は野戰病院附となり旅順方面に派遣され大に盡す所ありて看護手に昇進さる此の間軍功により勳八等且つ金圓を下賜せらる、後ち同三十九年二月負笈して東都に出て日本醫學校に醫術の修得を爲し、越へて同四十年醫術開業後期學說試験に合格し、更に同年九月醫術業實地試験に

合格し爰に前後三回に渉る至難の試験も無事登格するに至り、氏は未だ是にて満足せず眼科専門醫に志し、同年十一月醫科大學助教博士中泉行徳氏の醫局に斯學の修得淺からず、實地研究又大に努むる所ありてこゝに醫術開業の免許を受け尙も勤學に志し厚き氏は獨逸語學校に同語の研究をなし同四十一年九月東京醫科大學眼科撰科入學試験を経て入學し、河本教授の下に斯學の淵奥を究め、越へて同四十二年三井慈善病院眼科の醫局長に任命され、同時に東京中泉病院醫局長を兼ねるに至り、次に帝國大學眼科撰科修業證書を授與さるゝに至りて郷に歸り現時の場所に開業するに至りし經路を辿る氏は實に温厚徳實にして親切丁寧なること人の能く周知する所たり、氏又尋常の刀圭家にあらず寡慾恬淡にして毫も人に城壁を設けず、氏又頗る慈悲に富む、曾て細民の救助及公共其他寄附せし廉を以て本縣より木杯感謝狀を受けたること一再に止まらず其他氏の近時に於ける公務としては鯖江菊友會々長に、大正八年新醫師法による設立委員に推薦され、同年

十一月今立郡醫師會理事に當選、同九年同郡學校衛生研究會常議員に推薦され、同十年四月福井縣眼科醫會幹事に、同郡衛生會常議員に、更に福井縣菊花秋芳會副會長大正十一年四月福井縣醫師會代議員及び醫師會縣理事に各推薦されたりといふ、衆望の氏は今やトラホームに關する清水式の角膜切開刀發明の新案特許の登録を受くる杯と何處までも其の職に忠なる所以ありしたため好評漸次に擴がり福井縣下の市郡は言ふまでもなく遠くは石川、滋賀、岐阜、愛知の諸縣下より其の診を乞ふもの及び入院治療を乞ふもの續來するため流石に廣き病室も狹隘を告ぐるに至りしために氏は近く現狀を改め其の豊富なる資財を以てこれを病院組織になすべく目下其の計畫中に有之といふ、蓋し醫界の人物、漸く其功成らんとするや、徒らに物質的慾望に焦慮して、汲々乎たるもの多き今日專念斯學の研究に没頭せる氏の如きは洵に偉なりと云ふべく、刀圭界に群を抜いて行くのも決して偶然でないのである、氏の健康を祝福す。

田中義仁氏

氏は辯護士なり福井縣吉田郡松本地方の産、家は一郷の舊家にして名望あり、夙に志を抱いて東都に遊び中央大學に法律を學び明治四十年拔群の好成績を以て同校を卒業せし非凡の俊才なるが輟軻不遇正に拾年餘、此の間病に親しみ具さに世の無常を悟り身を僧籍に入れんとして果さず、茲は身を助くるの不幸とかや、大正五年頃辯護士を志望し試験に應じて一蹶之に登格、し事務所を福井市佐佳枝中町に開きて爾來熱誠以て訴訟事務に従ひ名聲を馳せ、而して今日に至りし人恬淡寡慾にして機略縱橫清濁併せ呑むの襟度を有し、且つ人の爲めに泣くことを好む、家豊かならざるも亦所以あるかな、氏は大正十一年三月辯護士界を退き判事に任せられ札幌地方裁判所に轉ずるに至れり。

石田嘉隨氏

氏は福井縣吉田郡岡保村宮地に生れし人、現今は福井市日の出下町に居を構へ、家は郷間に名望ある舊家にして資財亦豊富たり、氏は夙に普通の學を郷里に修め後ち負笈して東都に出て、明治法律學校に法律を専攻し、笠雪の功空しからず優位を以て卒業せしが後年實業界に驥足を伸ばすに至り、福井貯蓄株式會社を創立し自ら社長として孜孜事業の發展に努力し、大正十一年に數棟の大工場を福井口電車停留場附近に建設するに至り一大盛況を招來してゐる、又勝山倉庫株式會社の取締役たり、更に福井縣肥料市聯合組合長に、又福井九十一銀行の取締役に各推舉さるゝに至り其他の公職としては元岡保教育會長より福井市教育會評議員に選ばれ公私兩面百事に盡瘁せし効果の著しきもの多く従つて衆望一時に加はるゝこととなり、福井市會議員に當選すること前後三回に及び、現に福井市會議員たる

人なり、而して籍を政友會に置き同黨の爲めに大につくせし傑出たり温容德行にして風貌衆を抜く非凡の体は更に一段の畏敬する所あり敢て氏の前途を祈る。

久保義隆氏

氏は福井縣坂井郡春江村江留下の人、家は農を以て業せしが氏は鋤鋤を以て立つを欲せず夙に意を實業界に寄せ本縣の生命とも言ふべき絹織物の前途に志し、年少くして機業の研鑽に凝り、苦節數年能く其の効を奏し以て今日の大見を爲すに至りし人なり、氏は輕快にして人に接食よく且恤救に富み慈愛俠義に深かき士なり、今日の大を爲せし偶然の事にあらざるなり、信望又地方に厚く此の人今や同郡同村上村信用購買組合長たり、且つ同村村會議の職に在りて公私共に盡瘁怠ら

ずといふ以て地方の聲望更に深かきを加ふる所となる前途大に囑されつゝあり、敢て氏の自愛を祈りてやます。

光成清士氏

氏は現三國町電燈株式會社專務取締役たる同社の重鎮たり、氏は福井縣坂井郡三國町に生れし人、家は累代肥料を以て業となし來つたのである、氏の家は同町に於ける資産家にして且つ舊家を以て名望ある家柄なり、父祖より町公共に致せし勞苦一方ならざりしといふ、氏も又祖志を繼ぎて其の公共に努力淺からざりし名譽の人である、氏は温容にして學徳あり、故に三國町會議員に擧げらるゝこと前後三回余に及び其他同町の收入役を経て名譽助役たりしこと約十ヶ年に及びしと

いふ、更に坂井郡議員より郡參事會員に推舉せられ、所得稅調查委員たりしこと一回、其他各種の公職に擧げられしこと詮し來れば枚舉に遑あらざるものあり、而して其間公共に致せし大なる事業としては、三國鐵道の敷設に關する數年に涉る一事苦辛を初めとして、三國電燈の創業に付て致たせし勞苦は筆紙の能く叙述し得られざるものありといふ、公共の何たるを解する人の少なき今の世に氏の如き德行を見に迫ひて社會の爲め其の意を強ようするものあり、敢て氏の前途を祝福す。

竹 下 賤 夫 氏

氏は現に福井市會議員にして市參事會員たり、福井市月見町に生れし人、家は名

望ある舊家にして資財亦豈かなり、幼より學を好み修學する所深く、其小學校を卒業するや身を教育界に志し、福井縣師範學校に入り、苦節多年明治三十三年良位の成績を以て業を卒へ、直ちに縣下足羽郡内に教鞭を執るに至り、兒童を育する慈父の其れの如く致せし所深く氏又學殖あり識見あり、瀟洒脫俗の才人にして、品性人格共に高き雄辯の志なり且つ交情阻隔なき循容の人、従つて同子の敬愛する所多く、後ち幾年ならずして同縣今立郡國高村小學校長に擢擢せられ、前後十ヶ年の此間斯界に致せし盡効亦淺からず爾後累進して足羽郡視學となりて今日に至りしものなるが、後ち官界を去つて實業界に曠足を伸ばすに至り、越へて大正十年四月福井市會議員の改選に多數有志の推す所となりて當選し赤十字病院の赤阪新設の件に付ての盡効亦甚大なりといふ、僚星の間に燦然として噴々たる聲望を博してゐる。

高山庄太郎氏

氏は福井縣元坂井郡々會議員の職に在りし人、同郡春江村西太郎丸に生る、家は世々農を以て業とせしが氏は夙に實業界に志し厚く後ち同所に分家して絹織物業を開始さるゝに至る以て今日の盛大を爲すに至りしものなるが此の間具さに艱難辛苦を嘗め其堅忍持久一日の如く善く其の業に忠にし拮据經營凡を抜く所あり、以て名聲漸く地方に聞へ衆望次第に一身に聚る所となり、氏は又實業界に於てのみ然るにあらずして政治に又多大の趣味を有し一郷黨に信頼さるゝ所となりて、以來屢々選ばれて同村々會議員たりしこと前後三回に及び、現其職に在り、更に衆望を負ふて同郡々會議員に選ばれしこと一回、氏亦實業界に於ては福井商事會社長、南越印刷會社長たりしことあるのみならず、絹織物組合界に於ても重役の位置を占め改善進歩に貢献せし所頗る多大、其他大小會社の重役たるに屈指に遑

まあらざる氏に今尙吉田郡森田村東亞工業株式會社の取締役の要職に在り、氏の風格堂々として且つ奇才に富むの士なり、今や一郷の政治及び實業界の中心人物として名聲を博してゐる。

天谷鴻作氏

氏は福井縣吉田郡下志比村轟に生れし人、世々農を以て業とせり、威望地方に嘖々たり氏の家又舊家なり情腕にして磊落事物に阻隔なき氏は學殖あり、識見あり元同區に教鞭を執り兒友に信愛を置かれ辭して同村収入役に推され後年同村村會議員に選ばれしこと三回、現其の職に在り、其他學務委員、用水組合委員との公職に在りて一郷の公共に貢献せし所頗る多大なり、今や漁業會社を創立し氏は其

の社長となり大に努力しつゝありといふ。

前田友造氏

氏は福井縣足羽郡和田中に生れし人、前田佐治兵衛の七男にして現に福井市豊島下町に其の居を構へ機業を業とし來たりしものなり、氏の生家は舊家にして郷黨に信用多く且つ代々農を以て業とするものなり、氏の福井に出でしは明治三十一年頃にして又機業の人となりしも此の頃からのことであると云ふ當時の福井機業界は非常に幼稚にして時々京都及び關東方面に織物本場へ研究に出掛けたる程にして氏も亦出掛けたる當時の一人であるといふにおいていかに斯業の發展に努力の致たされたるを想起するにあまりあり、氏は勤勉着實にして事業に忠實なる人

なり且つ成功の蓄財を有し又慈悲の念厚くして信用従つて聚まる所となる、此の氏今や更に増築をなし改良大に發展を劃しつゝありといふ。

寺尾工子氏

氏は福井縣坂井郡下兵庫村に生れし人、家は農を以て相當地方に聞へし舊家なり氏は故ありて同郡芦原村の寺尾家に女婿として姻縁なすに至りしなり、年未だ三十を越すこと幾年ならず、天資温厚にして且つ爽快なる所あり而して善く事理を辨す、氏幼より又修學する所淺からずと云ふ、後縁家寺尾の姓を襲名するに至るに及び芦原温泉に於ける屈指中にして代々温泉旅館を以て業とし來りて聲名ありしが時勢を見るに敏なる氏は尙も時代に適應すべく更に幾多の改修及び増築を

加へ都鄙の旅客に便する多大にして縣内外に更に高評を博し居れり、氏又慈愛に富み且つ愛郷の念深ければ信望日に増し加はる所となり、同村消防員に、同村區會議員に各衆望を負ふて推舉さるゝに至り、現其の職に在りて公私共に大に活躍する所あり、而して氏の屋號を、いろは館と稱し居れりといふ。

大塚由右衛門氏

氏は福井縣坂井郡芦原村布目の人、慶應三年其郷に生る、年少にして聰敏慧悟且つ漢學の造詣深かく、夙に志を郷治に持すること重し、氏の家又一郷の舊家にして郷黨間に信望厚く、氏は郡制施行當時の郡會議員にして越へて村會議員、同村助役たりしこと前後數次に追ふ、明治四十一年に同村長に推選され、此の間公共

に盡せしこと甚大なるありて氏の聲望更に加ふる所となり、氏又磊落恬淡の質にして善く人と合す、氏又政治に大なる抱負あり、以て我黨の擴勢に努力常に淺からずといへば、一郷政治界に指目さるゝ人なり、蓋し所以ありと謂ふべし。

河部精氏

氏は福井縣坂井郡金津町の人にして其の郷に生る、家は藥種を以て其の業とし來りしもの、氏又之れを繼ぎて拮据經營業務の進展に銳意せり、之れ今日の盛況をなすに至りし所以なりとす、資性純厚にして眞直、夙に學を好み和漢の學を修得すること深かく、其の小學校を出づるや福井中學校に普通の學を修め、氏又祖志を繼ぎて大に爲す所あらんとして政治の學を東都に求めんとせしも、家情是を許

容せず、其の後郷に在りては同町役場員たることありて公私共に致せし効果の
なる所あり、氏又慈愛心に厚く公私共に寄與せしこと一再にして止まらずと云ふ
従つて郷の内外に聲望の噴々たるものがある、今や推されて同町々會議員の公職
に在りて更に一段の努力を此郷のために恪ますとは感激の更に深かきを加ふるの
みである、氏又父祖に似て政治に多くの趣味を有するに於て、更に斯界の爲め大
に期待する所も亦多からんとす、敢て氏の健在をお祈りするものである。

白崎仁三郎氏

吉田郡森田村を福井縣に於ける中心として機業界に不斷の活躍を試むること三十
餘年、斯界の中堅たる氏は福井縣吉田郡森田村八重巻の人、家はもとより資財あ

りたるものなるが氏の扶殖し來つた財實又加はつて今日の大を爲すに至り、將に
此の勢力は氏が信望の頼に噴々たるの由因となるに至つたのである、氏又愛郷の
念深かき所ありといふ、此氏今や越前石材株式會社長、横濱仲買人株式會社長、
福井燃糸染工株式會社取締役、福井絹織物組合代評議員、東亞工業株式會社社長等
の任にありて明敏な才能を遺憾なく發揮し、行く所がならざるなきは蓋し氏が大
成の今日見るに至つた所以が屬されて居る、それにしても氏の如き人材を出した
ことは方さに之れ森田村の誇りとせねばならぬであらう。

神尾義一氏

氏は福井縣坂井郡細呂木の人、氏の家又舊家にして一郷の豪農たり、従つて信望

祖より厚く、幼にして修學する所深く且つ漢籍に通達あるの名あり、資性温厚篤實にして人を遇するの途厚く、大に徳望の聲明あり、氏は年若くして戸長及び用掛等を務めしことあり、それより後ち同村役場書記となり越へて同村助役に累選され大に時の村長を援して努力する所大なるものあり、以て郷黨の信望を買ふこと更に深かきを加ふるに至りて村長に推され、又同村會議員に選舉され、進んで明治四十四年に坂井郡々會議員に當選し大正六年再び村長に推舉されて其の任にありたりしが大正十年其の地位を辭して閑居せり、此の間氏が郷黨の爲めに公私兩面に於て力を盡し多大の利益を興へたること殆んど枚舉に遑あらずと云ふ功績あり、蓋し氏の聲名が噴々たるものある又所以なきにあらずと云ふべし、氏は又醫學士神尾勇太郎氏ありて醫術の開業を爲し以て地方の患者に應診又厚しと云ふ、氏又温容にして直ちに人を推服せしむるの徳を持つてゐるとのことである編者は此の樂しき家庭の兩氏の健康を祝福したいのである。

西川義男氏

醫師西川義男氏は福井縣足羽郡下文珠村上河北に生れし人、家は農を以て業とする名望家たり、氏は幼より學を好み、里郷の小學校を卒業するや福井中學校に入學し、大正五年優位に同校を卒業し、續いて金澤第四高等醫學部に醫學を専修して卒業するや、大正八年金澤病院婦人科に研鑽せしこと三年に迫ひ、歸來今日に至りし人である、歸るに及んで氏は現縣會議長義江民治氏の懇請する所となり繁務を割いて其の乞ひに應じ全院を殆んど一身に担して應診大に努むる所あり、以て噴々の名聲を揚ぐるに至る氏は手腕絶倫にして患者の信賴非常に厚く従つて先輩義江氏の信用又厚く、人爲磊落、洒脫人と語るに些の障壁を設けず温容直ちに人を敬服せしむるの威徳を具備してゐる、蓋し物質的慾望に焦慮として漸く成らんとする功を阻止するの人物多きが中にも斯學の研究に専念し、初志の心を屠

一層深かましめんとの絶大の素質を有する、氏の如き、誠に斯界の爲めに慶すべしことである、氏の如きは其の人格に於て才幹に於て方さに僚星の間に燦然たるものがある、斯は又以て氏に噴々たる聲名ある所以である。

谷口宇右衛門氏

氏は福井縣吉田郡圓山西村新保の人、慶應二年四月二十日同郷に生る、氏の家は二郷屈指の豪農として夙に令名あり、氏父祖の後を承けて賑恤を事とし、縣會議員、其他の公職に就き一身を忘れて公事に盡瘁して信望あり、氏は徹頭徹尾政治的色彩を帯べる人にして飽迄憲政の完美を期せずむば己まざる底の奮闘的人物なり、未だ中央政界に其の名聲を馳するに至らずと雖も郷黨の間には太た重きを爲し現今憲

政會に屬籍して同派の牛耳を執るに至りし人である、氏は學徳共に高き温厚篤實の人として衆望の噴々たるものがある、現に福井地方森林會議員、吉田郡農會長、吉田郡教育會長、日本赤十字社有功章佩用特別社員として貢献淺からず、尙實業方面に於ての氏は曾て農工銀行に重役として行運の爲め銳意畫策せしを初めとし福井銑鐵株式會社の創立に參畫し身自から之れが社長となりて社務を總覽し非凡の識見を揮ひつゝあり、令息森氏をして専務取締役とし實務を處理せしめ百餘の事務員職工を使役して盛んに活躍を試みて居る、其他福武電鐵株式會社取締役、福井縣信用組合聯合會理事を兼ねて寸隙倦む所なく、更に大正十年吉田郡圓山西村々長に推舉されて就任し現其の職にありて公私共に陸離たる光彩を放つてゐる氏の健康を祈る。

鷺田 修 氏

醫師鷺田修氏は丹生郡刀圭界の權威として頼に藉甚たるものがある、氏は福井縣丹生郡下川去の人、明治二十一年十二月鷺田又兵衛氏の長男として生る、氏の家又一郷の恆産たり、普通學を武生中學校に卒へるや、千葉醫學專問學校に醫學を專攻し大正二年同校卒業、同年東京大學皮膚科及び濱田病院産科に入り助手として研鑽大に智見を廣むる所あり、大正四年辭して現在の所に鷺田醫院を開業して今日に到つたのである、氏は又全科中特に難病不治と目される、ルイレキ、特別注射療法は氏の最も得意とする所である、今や同郡刀圭界の一人者として重きを爲し聲名噴々として郷黨に其の將來を囑望されてゐる。

野村 外 來 雄 氏

第十三師團經理長たりし正五位勳三等功五級陸軍一等主計正福井市助役野村外來雄氏の聲名は正に甚藉たるものなるが、氏は福井市春山中町の士族にして明治七年十一月同所に生る、俊才當時既に郷黨の間に其の將來を期待されたのである、氏は長ずるに及び軍人たらんことを望み、士官學校を抜群の好績を以て卒業し明治二十八年五月陸軍歩兵少尉に任官、第十六聯隊附となり陸軍中尉として第三十聯隊附となり陸軍一等主計として第一師團經理部員となり陸軍二等主計正として第十五師團の經理部員とし諸隊に在勤、次いで一等主計正となりて第十三師團經理部長に轉補され、任にあること二十有餘年、此の間臺灣、韓國、浦潮派遣を命ぜられたことがあつた、氏の人格圓滿にして謹直、人と接して城府を設けず、温容人をして畏服せしむるに足るものがある、蓋し氏が到る所に官民の間に評判よ

く、聲望の噴々たるものある又所以なきに非らずと云ふべきである、氏は大正十年十一月福井市會全員一致の推舉する所となりて福井市助役となり現其の椅子に在りて好績を擧げつゝある人士である。

布川正輔氏

大野町長布川正輔氏は福井縣の山間大野郡大野町の人、夙に自由主義を抱持して政治問題に熱中し國權論を鼓吹し立論堂々一世を風靡して大に時人を提撕し明治維新の先覺者を以て崇敬さるゝに至り幾許ならずして、福井縣會議員、大野郡會議員、大野町會議員に各優勢の得票を以て選舉されしこと數次に及び、氏は酒造を以て業とし資産豊富にして一郷に甚鳴たり、人爲着實眞摯に敬服に價するも

のがある、是れ氏が公私人として信望ある所以である、亦人に接して圭角なく温情の流露たるものあり任俠、義に勇んで、公共事業に卒先盡瘁し、飽くまで奉仕的觀念に富んである、又政治界に於ては政友會に屬藉して黨勢の擴張に留意すること篤く亦以て氏の抱負と意氣を知るに足る、今や衆望に依り大野町長の椅子にありて公私共に赤誠を揮ひ町民の同情亦頗る厚く勢力容易に侮るべからざるものがある、年正に六十余歳にして尙壯者を凌ぐの慨あり以て氏の健康を祝福す。

鷺田又兵衛氏

從六位勳六等鷺田又兵衛氏は福井縣丹生郡下川去の人、元治元年二月同郷に生る氏の家は三百年來の由緒深かき一郷の名門にして令名あり、氏又祖志を承けて一身